（昭和八年七月廿七日第三種郵便物認可）

神奈川縣教育時報

（皇紀二千五百九十三年）

毎月拾日・廿五日發行

購讀料　一部　六拾六錢
廣告料　一年　貳拾五圓
　　半年　貳拾五圓
　　四分一頁　貳拾五圓
發行所　横濱市中區日本大通縣廳内　神奈川縣教育會
編輯兼發行人　横濱市住吉町五ノ五八　吉田清太郎
印刷人　横濱市住吉町五ノ五八　鈴木清五
印刷所　横濱活版舍

我が校の光榮に感激して

小田原第二尋常高等小學校長　佐藤喜作

折角御指名にあづかつたが私としては人に讀んで貰つたり、聽いて貰つたりする程の抱負も持ちません。只々驀地に、國家が要求する國民教育の精神に副ふ樣に努力するのみで、毎日之をコツ〳〵と忠實に、使命を果すべく突進して居るだけの話で、餘り小六ケしい理屈などは考へない、又考へ樣とも思はない。言はゞ議論に花を咲かせる理論の遊戯化よりも、默々として實行する方が幾層倍もましであると考へる、……彼の禪海のそれの樣に……今日の時代には特にさうである。それにお互教育畑に居る人の間で、分り切つた樣なことを尤らしく云ふにも當るまいと考てそれは止めた。さうして矢張り、此の學校が校地としての歴史の上に、又學校自體としての沿革の上に、寔に畏い極みの數々を有つので、それらの概略と、此の特殊的境地に立つ私の覺悟とを述べて見ることにした。次に掲げるものは本校光榮の極概樣で、而も概括的に云つてあるが、これは「昭和八年度の教育」といふ、本校の經營を記した小冊子の卷頭にあげたものから、謹で再錄したものである。

明治天皇御駐蹕の地

明治六年　天皇箱根宮之下溫泉より還幸の御途次、八月廿八日足柄縣廳に臨御遊ばさる。此の地は即ち我が現在の校地にして實に御駐蹕の聖地なり。

昭憲皇太后の行啓

明治九年　昭憲皇太后未だ皇后にましますの御時、國民教育御奬勵の旨を以て、九月十三日當時の幸學校に行啓遊ばさる。これ寔に稀有の御事にして我が校の光榮とする所なり。

常宮周宮兩殿下の御成

明治二十六年二月四日　啓蒙小學校開校式擧行の折、兩殿下の御成りを始とし、明治四十二年に至るまで臨御實に十數回に亘らせ給ふ常に親しく兒童御奬勵の令旨を賜り、且つ學用品御下賜の鴻恩を忝うす、誠に當時を偲びて感激に堪えざるものあり。

斯くの如く、我が校は畏くも明治天皇御駐蹕の地に在り、且つ昭憲皇太后の行啓、常宮周宮兩殿下御成りの光榮に浴し寔に誇りとする所なり。此の御盛事と光榮とを永遠に傳へて、盡忠報國克く御聖旨を奉じ、御令旨にこたへ奉らんとする至念愈々肇きものあるを感ず。

以上が事蹟のほんのあらましである。所でそれならどんな施設をなし、如何に經營して行つたら、この光榮を擔ふ學校として耻かしくないかと云ふと、そこは腦味噌の少々不足してゐるせいか、これと云ふ見るべきものもないので甚だたよりない譯である。而し自分は結局、此の光榮を眞に自覺する我の信念が、總てを解決する根幹であると信ずるのである。たとひどんな立派な事を計畫し施設して見ても、それが誠實をもち、純眞の心で、本當に遺憾なく實施されて行くのでなければ、價値は無いものと考へる。施設其ものゝ當を得てゐるといふことは、無論大切な話であるが、同時に或は以上に重要なることは、此の無上の光榮を腹のドン底から眞に自覺することで、しみ〴〵有り難いことである、勿體ない次第であると、十分我と我が心に刻みつけることであると思ふ。この信念が明確に意識されて來れば、そこから湧き出る熱と力とは他の何物よりも、强大なもので、この土臺の上に立つて行ふことは、よし多少の拙劣さはあつても、事柄は小さくても及ぼす所の教育的効果は、必ずや見るべきものがあると衷心から確信してゐる譯である。

こんな次第で自分等は何時も、此の他に類例の無い程の光榮に浴する學校に職を奉ずる身の冥加と、此處に學ぶ生徒としての幸福さとを深く肝に銘じて、片時もこの事を忘れない樣にと心掛けてゐる。生徒にも御聖蹟の地であるといふこと、光輝ある學校の歴史とに就ては、あらゆる手段方法で熟知させ信念づけることに努めてゐる。「宮樣方の御勉學遊ばされた蹟で勉强することの出來る樣な生徒は、全國にないことである、決してこの榮譽を耻かしめてはならない。」こんな言葉は本校では、何れの職員でもどの學級でも、折に觸れ時に隨つて、口癖のやうに云ふ誨告の言葉の一つである。かくしてやがて、此の名譽ある學校の生徒として耻かしく無い生徒でありたい。而して耻かしくない町民で、縣民でありたい……耻かしく無い日本國民でありたいと、良心の覺醒を目指して進んでゐる。

嘗て本校の敷地問題が縺れて來た際、一部の人々の中には小學校を建てゝ猥りに頑是ない子供を引き入れる事は、正に御聖蹟を汚すものであると云ふ議論もあつた。當時全く口を緘して一言も語らなかつた私の心中には、幸此所に學校が建設されるならば、必ずや誓つて、御聖蹟に相應しい實績を擧げて見せると堅く決意したのであつた、勿論此の覺悟は今日と云へども些も動搖はしないが、只々事志のやうにならぬのが殘念でもあり、又耻かしくも感ずるのである。何事も現實は理想の通りにならぬのが常である、本校の目指す彼岸も極めて遼遠で、現在では全くお話申すもおこの沙汰であるが、只覺悟だけは、言ひ過ぎるが日本一の光榮を汚さぬ樣にと神かけて專念してゐる。

感激の餘り平靜を缺いて、可なりレールを外れた點があつたことをお詫する。それ計りでなく、議論はしないと言ひながら、思はず議論になつて自家撞着に陷つたり、又出來るだけ簡略に述べようと思ひつゝ、發表が拙いので知らず識らず冗漫に流れて、貴重の紙上をあたら埋めたりした數々を謝して擱筆する。

宗教と教育の關係（五）

壽山良海

十三、家庭教育と佛教

教育、遺傳、習慣、に依つて人間の運命が大部分左右せらるゝことは、古來何人もが口にする所でありますが、胎内教育に續て尤も大切なることは家庭教育であります。リツテルは『教育はいつより始むべきかと云ふに、人間出生の時より始むべきなり』と云ひ、バルンは『教育はいろはを教ゆるを以て教育の始めと思ふべからず、父母の言語、動作、兄弟の交情は皆教育にして、赤子の時より既に教育は始まりつゝあるなり』と申して居ります。これは、家庭教育からして教育は始まると云ふ世間普通の考へであります。

抑も胎内教育は種を地中に播くが如く、家庭教育はその種が漸く嫩芽を生じたやうなもの、學校教育は農人が之を培養するやうなもの、社會教育はその結實を藏に收むるやうなものであります。

小兒の頭は白紙のやうなものの、之に何んでも寫すことが出來ます。家庭に於ける父母の言行は知らず、識ずの間に小兒の頭に映されます。彼の五・一五事件の陸海軍人が告白せる所を深く味つて見ると斯る重大事件は多くは家庭教育の間から芽ばえてゐることがわかります。

彼の基督教信者は漸く年長じて、科學の力を養ひ、その信仰に不安と懷疑をいだきつゝも、尚、且つ、アーメンを唱ふるものは、赤子の時、母上の懷の中で、膝の上で深く信念の力を、目から、耳から心地に吹き込まれてゐるからであります。我國でも祖父や祖母又は兩親が深信の人であれば、その家庭から生れる小兒はその純信の感化を受ける事は事實であります。そこで或る家庭では、家内中の御箸を佛壇の下の引出しに納めおき、交る〴〵そこに禮拜して御箸を戴き食事につきます。

箸取らば師匠や親の恩を知れ

我一力で食ふと思ふなと平素教訓し、祖先崇拜、神佛に對する敬虔の念を修養させます。そうして、月に一回宛高僧を招待して、家内は元より、店員に至る迄、佛前に集合し、御法話を拜聽するのであります。故陸軍大將山縣黑木、津野、各閣下の家庭には明治の高僧雲照大和上の侍者として毎月法話に行きました。又故工科大學長渡邊渡先生、澤柳博士、丹波敬三博士大倉組重役松田氏の家庭、貿易商忽那惟次郎氏の家庭、その他第三流四流所の家庭へは月々法話にゆきました。今も現に實行せられつゝある家庭は澤山にあります。斯くして敬虔の信念を養ふことは七生報國の生ける人間を作る所以であります。

茲に謹んで拜記致しますことは

今上天皇陛下　御幼少の砌伯爵河村純義氏の御家庭におはせし時、伯爵は明治大帝のおゆるしを得て苟くも大日本帝國の陛下は三寶深信の御修養の必要なることは、歴史上幾多の活ける事實ありとし、平素信仰しつゝありし、我師たる明治の高僧雲照大和上を毎月十八日觀音の日にその邸に屈請し、眞言の密壇々裝飾して香華、燈明、飲食の供養を叮重にし、大和上に願つて玉體安穩の修法を乞ひ、それより、王子を自分の膝の上に御戴せして、大和上の法話を拜聽し、眞言醍醐の法味を玉體に加持薰入せしめ、以て大日本國礎の金剛力を養成せられました。斯くせらるゝこと二三年間續たのであります。その時、今上天皇陛下の玩具、ちやん〴〵子、等等のものを下賜せられ、大和上へは特に銀の牛の水差を供養せられ誠に深き法緣を結ばれたのであります。彼の神皇正統記を拜讀しますと、我國體と密教は一味乳水の狀態で二而不二の關係を持つてゐることがわかります。是等の關係からして、大和上は特に今上天皇陛下の玉體加持に萬幅の白熱的信念を薰入せられたのであります。

我等の聖上已に然り、況んや日本國民一般の家庭に於ては佛教の信念を基調として、人生觀を定め、皇室國家の爲めに奮鬪せねばなりません。

此外家庭と學校と密接な關係を保つて家庭教育に十二分の力を入れねば成らぬ事は皆さん御承知の通りであります

十四、學校教育と佛教

我國に於ては、學校に於て宗教的教育を施しては成らぬと云ふことは、彼の明治三十二年に有名な訓令が出ております。即ち『一般ノ教育ヲシテ宗教ノ外ニ特立セシムルハ學政上必要トス。依テ官立、公立學校及學科課程ニ關シ法令ノ規定アル學校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ、又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許サザル可シ』と成つてゐる。それは明治の初めに學制を立てました時に明かに宗教と教育を區別し、學校に於ては專ら道德教育を奬勵すると云ふ意味からであつて恐らく立法者の意思は宗教不必要論者ではあるまいと思ふ。

然るに此法令をはき違へたものか、教育家の中には純信なる信念の人が少ない。そこで學校で教へて呉れるものは人間相互の德目の解釋であつて、そこに切れば血が流れ出ると云ふ生ける精神活動は微力である。

現實の日本人がエロ、テロ、グロ、三路の交叉點に立つて皮想の生活を爲し、稍もすれば、個人主義の人間が增し、根强い信念の力に乏しい、爲政者も財閥も、その他等々が國家の爲めの自分ではなくて自分の爲めの國家と考へて、おの〴〵、國家を自分の爲めに利用せんとする樣な不都合な奴が增加したと云ふ事も從來、學校教育が理智の教育に全力をあげるばかりで、活ける人間を作ると云ふ宗教的人格者の先生が比較的少なかつたからではありますまいか。

多數の先生の中には、前述の訓令をはき違へたものもあるらしく。私が田舍にゐる時小學生が遠足運動に出てお寺の庭で休息し、先生がステツキで地藏樣を押しころがしたり、墓石の上に腰をかけて放屁をするものもありました、我輩は苟くも人の教道職たるものが、生徒の面前に於て、斯る人非人の行爲をするのを見て、手强くなじりますと、彼の先生も頭を下げた事實もある。遠慮なく申せばお寺の本堂の前に立つ先生はあるが頭を下げて敬虔の念を捧げて自己の菩提心を長養することに氣をつけてゐる先生が何人あることでしよう。

現在のやうに澤山な佛教宗派がある以上は學校に於て一宗一派の教育をすることは、元より弊あつて利はないでしよう。そこで、あらゆる學校に於ては、先づ先生自身がほんとうの宗教的修養をして、知らず識らずの間に生徒の宗教的生活意識を開發して下さることが大事であると思ひます。德目の解說や、形式的道德話で何んで生ける人の心を導かれましやう。

實に現代は驚いたもの、人の罪を審くものが赤くなつたり、女教員と姪賣、萬引、制服巡査が銀行の支配人殺し、僧侶が不信、その他等々、誰か鳥の雌雄を知らん、五・一五事件の被告の告白、特別辯護の辯論を心讀すると涙なくして誰が平氣で讀むでしよう？　これ等の實相を觀照する時、免れて恥なきもの、又制服をぬぎ捨てたり、一定の職責を去れば、行くとしてやらざるなき狀態が、新聞の三面記事の上に活躍しておるではありませんか。（つゞく）

神奈川縣教育時報

第二十四號　（昭和八年七月廿七日　第三種郵便物認可）

外山福男氏近著「藩學寺子屋教育と現代教育」「國民保健衛生の實際問題」を讀む

山崎博

外山福男氏と私

私には外山福男氏といふ言葉が、非常に懐かしく考へられる。僅かに五ケ月の學務部長、神奈川縣教育會長ではあるが、全く忘れられない教育行政家であり、引きつけられる人であつた。

山形に轉ぜられてからも幾度も御手紙をいたゞいたり、著書もいたゞいたりした。私の一生の印象として殘ることに、私の渡歐後援會の音樂の夕、記念會館にわざ〳〵來られた。そして私の旅の杖として「歐米遊記自治と產業」にサインして送られた。私が歸國して第一に受けた祝辭文が外山氏であつた。

瀧澤曲南先生が言はれる如く、私學出の俊秀で、頭腦明晰、學識豊富、手腕縱横の人である。私は宮城縣へ講演に行つて、多くの教育者から在任時代衆望湧くが如き觀を感じた。

努力の結晶十七著

氏は確かに格別の努力家である。私は「教育時報」第二號の頭言を思ひ出すのである「數分時にして克く數千言を叙述する能文家である。滔々乎、數時間講演を續けて倦まざる達辯家である。」「其の知識の精博なる青年教育、產業施設、職業指導、社會問題等の微細に至る豊富な經驗と卓拔の識見を有し、而して又非凡な觀察力の所有者であつた。」

氏の近著「藩學寺子屋教育と現代教育」「國民保健衛生の實際問題」も努力と識見の產物である。氏が如何に能文家であり、努力家であるかは、氏の著書冊子が十七種あり、主要論文として發表せられたものが、卅四稿あるのでも知られる。論文といつても、地方行政、自治機關、瓦斯稅などに發表せられた堂々たる文献のみである。

社會人教養の教育制度の革新

先づ「藩學寺子屋教育と現代教育」序文に氏の人生的態度が述べてある。「私は從來色々な職務を奉じたが、新しき職務に就く毎に、恰も彫刻家が大理石を前にして、如何に自己の理想を刻み出さんとするか？　の歡喜と希望とを有するに至るのである。先づ以て根本的調査と統合均勢の觀察を遂げ、然る後諸般の政策改革を斷行すべく不盡の努力を致したいのが念願である。」と。

本書は氏が宮城縣と神奈川縣とに於いての教育行政研究と教育行政體驗との記錄である。氏は一先教育行政研究を終り警察行政に專念するの一里塚であるといつてゐる。

本書の中心をなすものは教育制度の革新であると思ふ。寺子屋教育については詳細述べてないが仙臺藩の教育を知るのと、現代教育との交渉點を知らうとする者には便利である。

思想系統から見るとき第八章の教育制度と財政、第九章教育と自治との協調については、教育制度の革新として見られる。移りつゝある現代社會人教養の教育制度の革新といふことが氏の教育に對する彫刻者的理想であらう。即ち教育指導精神をこゝにおいてあるものと思ふ。第一　幼稚園、託兒所についての內容改革、青少年の職業指導の要諦、青年團、少年團向上の實驗談、感化事業の改善事項の研究は社會教育振興についての尊い文献である。

第二に實業教育の振興としての宮城縣に於ける實蹟は參考となる。女子教育の實際化女子實業教育の振興實際についても參考となる。

第三教科課程の研究について氏から聽くことは私の最も興味を持つた一つである。傾聽すべきことばかりが述べてある。

第四家庭教育についての研究と學校衛生の改善研究とについて行政家から聽くことを喜しく思ふ。氏の家庭教育振興策六ケ條、學校衛生の改善要綱十六ケ條も參考になる。

第五思想問題に對する對策として教育學說の根本的研究教育界の不安除去、教員の整理就職難の除去、校長の統督力充實、教育機關と警察との連絡と幾多重要問題についての研究が述べてある。

第六教育財政については、本縣に勤務せられて居る時代組織した學校經營經濟化實行會等の大道が知られる。

第七教育と自治との協調についての欠陷、協調についての外國事例など參考に資すべきであると思ふ。氏の教育と自治との協調については、歐米遊記に詳述せられてゐる。

要するに本書に希求しつゝある氏の中心思想は、社會人教養の教育制度革新といふことにあるものと信ずる。

國民保健衛生向上の計畫

「國民保健衛生の實際問題」は山形縣民の公衆衛生と保健施設の整備についての計畫であると共に、日本國民の保健衛生向上の行政計畫である。

氏が衛生課、警務課、健康保健課、工場課、學務課を總動員して實際乃至事例を考究し調査しての上に確立を計らんとしたことは、本書の內容が如何に價値あるかを察せしめる。

我國民の健康と衛生については民俗的統計的に考察しての事實の上に出發して述べてある。學生生徒の健康、國民衛生思想の欠陷、衛生施設など一と通り理解し得られることは便利である。

次ぎに日本の疾病地方的分布即ち都會、農村的分布と衛生保健施設の一班についても述べてある。

何といつても第八章山形縣の地方的疾病と保健衛生、第九章保健衛生の將來の二章は本章の中心をなすものと思ふ即ち地方的の特質、保健施設の實際、保健施設の改革、保健行政の組織化などは、極めて具體的であり、然かも全般的の研究である。それであるから行政家は勿論のこと、教育家、社會事業關係者の必讀すべき文献であることを信ずる。

國民保健衛生向上の分野は極めて廣範であると思ふ。本書を讀むことによつて一層その感を深くした。私は本書に記載せられたる事業なり施設なり、運動なりが、保健向上の民族的徹底して行くであらうことを信じて喜ぶものである。（八・九・三〇）

少女小說　修二

秋本理貴作

私は、春になると、毎年のやうに、遠く過ぎ去つた一つの出來事を思ひ出します。

それは、修二と言ふ男の子の事です。男の子だなんて言ふと、何にも、小さい子供のやうであるけれども、もう、今年は十七才になつて居る筈です。

今から、丁度六年前。

修二は、躰が弱くて――其の位だから、やせつぽで、ちびで、元氣など少もなく、顏色も、何時だつて優れて居なかつたのです。

校舍の日溜りなどに、一人ぼつちで、それは〳〵、つまらなさうな顏をして、うづくまつて居ることなどよくありました。おまけに家のくらしは、腰の曲つたお爺さんが、天秤かつぎで、僅な淺蜊などを賣つてたつて居た――そんなことを見ても、修二の家が如何に貧しかつたか知れるでせう。

垢じみた、修二の淋しい顏！

私は其の時分、修二の居る組を受持つて居た先生です。修二は私が二年間も接した、可愛い教へ兒だつたのです。

丁度、學校の近くのお觀音樣の梅の花が盛に咲いて居る頃のことでした――ついでに、此の學校のあつた處の樣子も、少しばかりお知らせしときませう。

此處は橫濱の郊外の、山と言ふより丘と言つた方がよい位な、山と山との間にある、靜かな、小さな町でした。

そして、其の町の一端を、觀音川と言ふ、さう大きくはないが、きれいな川が、さら〳〵と、流れて居りました。

其の川を挾んだ兩側の堤には、澤山の櫻が、ぢうつと續けて植へてありました。大分大きい樹で、四月になると早々に咲く此の櫻は「道源寺の櫻」と言つて、「お觀音樣の梅」と一しよに、其の界隈では一寸知れて居りました。

私は、學校の行きにも、歸りにも、此の堤を通るのでした。梅の花時分から、葉櫻時にかけて私の幸福は、そりやあ――そりやあでした。

電車は、市內から此の町のすぐ近くまで來て居るので、大變便利でした。日曜や其の他の休日などには、市內の人達が伴れたつて、散歩や摘み草などにやつて來ました。

言はゞ、のんびりとした、生命の洗濯場とでも申しませうか。

兎に角、かうした處に在る學校、修二は、其處の尋常四年生だつたのです。

前にも申しました通り、それは丁度三月、お觀音樣の梅の花が、盛に咲いて居る頃でした。

何でも、土曜日の最後の時間――さう、體操でした。

（大變陽氣はよくなつて來たし今日こそ一つみつちりやらう）

私は、そんなことを考へながら白い體操服になつて、胸をはづませながら、運動場へ駈け出しました。

生徒達は、もうすつかり整列して、私の、何時も來る方に眼を一樣に向けながら、待つて居りました。

私はいつ早く

「今日はやらない者はないのか？」

と尋ねました。

元氣のよい、背のずんぐりとした、實木と言ふ級長は、大またに一歩前へ進み出て、得意に

「ありません！」

と大聲で答へました。

私は大變嬉しかつたので、それに、少しからかつてやりたい樣な可愛らしさも手傳て、にこ〳〵しながら

「お前等大變正直だな、お日樣が笑つていらつしやるよ、いつも頭が痛い、おれお腹が痛い、足が痛むの、風邪をひいたのなんて……、ちと怪しいて！」

子供達は一齊に笑ひ出した。

「チッ、二ッ三……」

其の中に番號も終つた。だが一人、生徒が足れません。

私は、級長の報告と思ひ合せておかしいので

「一人足れないじやないか」

と、少しせきこんで、誰に言ふともなく申しました。

生徒達はきよろ〳〵しながら、ざわめき始めました。

しばらくすると、一番終りの方に居る、銀ちやんと言ふ、身なりは小さいが、巾着頭で、眼のとても大きな生徒が

「あつ、修ちやんが居ない、先生！」

と、素晴らしい發見でもした時のやうな、頓狂な聲を出しました。

私が聲の方を見た時、なる程、修二の淋しい姿は見えませんでした。

何時も氣にかけて居る修二。

（何處へ行つたのだらう？）

私の胸の中は怪しくざはめきはじめました。

「どうしたんだ。誰か、修二を、修二を知つて居る者は居ないのか……何とか言つて行かなかつたか……」

「……」

「知りません」

「知つて居りません」

生徒達は、私の可愛さうな程、はつきりと、無遠慮に答へるのでした。

（どうしたんだらう？）

其の中一人の生徒が教室を見て來た。

「荷物がない――帽子も……」

（どうしたんだらう？）

私の不安は增していつた。

生徒達は、もう體操――と言つても、ドッチボールのゲームがしたくてたまらぬらしい。

私は、取敢へず級長に、修二の家を尋ねさせることにしました。

（居てくれゝばいゝがな）

そんなことを考へながら始めた體操は、私が運動場へ飛び出た時思つて居たそれとは、まるつきり違つたものになつてしまつた。

× ×

體操が終へて、生徒達が歸ると間もなく實木級長は戻つて來た。急いだとみえて、額は紅く汗ばんで、息さへはづませて居ました。

「先生！　家にはおばあさんが居られたきり――でも修二君のかばんは、疊の上に投げ出されてありました。おばあさんがつんぼらしいので、うまく話が出來ませんでしたが、何でも、歸つてすぐ外へ飛び出して行つたさうです。」

「さうかい、そりやどうも御苦勞だつた。兎に角、一たん歸るには歸つたんだな、家へ……」

「……」

私は少しばかり安心をしましただが而し、このまゝにもほつとかれないので、修二の家庭を訪問ることにしました。

急いで洋服に着替へ、教室の窓などしめて、整頓始めました。

處が、私は、こゝで更に、驚くべきことに遭遇してしまつたのです。

それは、毎月此の學校で一回宛集める、兒童保護會費――私が、それを今日集めて、袋のまゝ教室の私の机の上にのせて置いた、その中味が殆んど失つて居ることです。

こんな處へ放つとくと云ふのが已に私の禍なのだ。

だがしかし、私としては、神聖なるべき筈の、教室のことではあり、相手が自分の可愛い教へ兒達であるので――何時も神樣に對する時の樣に、絕對に信頼して居たが故に。

かう言ふと、如何にも犯人は生徒であるかのやうに思へるけれども、私の此の時こそかふ考へるより仕方なかつたのです。

此處で私は、更にそれ以上の、自分の愚しさを申し上げなくてはならなくなつてしまひました。

この會費が失くなると言ふことは、今始まつたことではないのです。前からもちよく〳〵あつたことなのです。

だが憶病な私には、可愛らしい生徒を、どうしてうたがふことが出來たでせう。

只其の都度

「惡い事をすれば、必ず、惡いむくいがある。天・地・吾が知つて居る。かくさうと思つても、何時かは知れるのだ」

なんて、關係のない生徒には、實に不思議に思へる程、突然言ひ出しては、うやむやに過して居たのです。

そこで、今度も

（まあ仕方がない、何時もの樣に自分で、そつと辨償しとけばそれですむこと、何も子供達に、僅の金のことで、氣持の惡い思をさせる必要はない）

私は心の中でつぶやきながら外へ出ました。

（とろりと、眠むたい樣な小春日和だ。觀音川堤の櫻の小枝も、どうやら紅味を增して來たな。蕾も活動をはじめたな）

そんなことを考へながら、土堤下の道を歩き續けると、何時の間にやら、修二の家の前まで來て居ました。

すゝぼけた表札――森藤兵衛、からうじて讀める位、これは修二のお爺さんの名である。

「御免下さい」

ゆがんだ格子戸は、ぎち〳〵と音をたてながら開いた。家の中はくらい。

不意の侵入者に、おばあさんは驚いた樣に、私の額をきよとんと見て、急に

「あゝ先生さんですか、孫めが色々と、御世話樣になりますだ……」

おばあさんの聲は、何か惡いことでも起るのかと豫期してか、おろ〳〵とふるへてゐる。

「……何とか、あれがしでかしましたたか――さつきも實木の息さんがお見えなすつただが……」

私はおばあさんに心配かけるのが氣の毒なので、つとめてなんともなくよそほうと思つた。

「何、別に――これと言ふ事もないのですがね、實は先刻級長を一寸よこしときましたから、大體は御存知だらうとは思ひますが――今日終りの時間に、修二君が、だまつて見えなくなつてしまつたからね、少し氣にかゝつてね……は一寸……」

「はあ、その事で、さうですか、さう言ふ奴です……あれも、本當に我儘者で、變屈で、躰は弱いしするから、私達も持て餘して居るで、實は、其の何ですよ、親の方へ歸さうかと思つたですが、お恥しいながら、悴夫婦も朝鮮で其の日暮、それにあんな奴でも、私にとつては一人の孫め……」

おばあさんは、古いくちや〳〵の手拭を握つて、額に當た。

私は、たまらない苦しさが、胸にこみ上げて來た。

「先生樣に、何時も心配かけて申譯ねえだ……。」

其の時、表の格子戸がぎち〳〵踊るやうにして開いた。

お爺さんが歸つて來たのだ。

「ああ、先生さん！」（つゞく）

相談＝武史

金澤文庫印の研究

關　清

宋元本や鎌倉時代の圖書目錄を見ると、往々之に『金澤文庫の印記あり』といふ事が注されてゐる。印記の有無を注することは、その圖書の經歷を知らす上からも、又その圖書を價値付ける上からも大切な事であるが、金澤文庫の印記にかぎつて、しかく簡單に取扱ふ事が出來るものであらうか。自分は文庫に就任して以來、文書整理の合間に、文庫舊藏の書目やその所在の調査を始めたので、自然澤山の金澤文庫の印記を見る事が出來た。自分が今日までに調査した圖書の數は

文庫現藏　三五八一部　七一五六卷
同　舊藏　一八部　八六三卷

合せて二千六百九十九部八千十八卷である。現藏といふのは現在當文庫に收藏されてゐるもので、舊藏といふのは現在では庫外に散在してゐるものである。庫外に出てゐる數はこの位の數ではなく、まだ澤山にあるのであるが、以上はたゞ自分が直接に調査したものだけの數である。

調査した圖書の數が多いだけに、自然澤山の金澤文庫印を見る事が出來た。その都度記錄した事を比較研究して見ると、この印記ほど澤山の種類があり、又この印記ほどその捺方に變化のあるものは他にあるまいといふ事を發見すると同時に、從來一般の人から無條件に肯定せられてゐた儒書には墨印、佛書には朱印といふ說なども、根本から考へ直さなければならない事を知つた、そこで自分は次の樣な項目を擧げて、金澤文庫印の研究を發表して見たいと思ふ。

一、墨印と朱印
二、欠前印と欠後印
三、單郭印と重郭印
四、重郭印の種別
五、眞印と僞印
六、文庫印は何時出來たか
七、文庫印の使用法

一、墨印と朱印

第一に訂正したいのは儒墨佛朱の說即ち儒書には墨印、佛書には朱印が捺してあるといふ說である。この說は一體何處から出て來たかといふと自分は林羅山の丙辰紀行から出たものであらうとおもふ。

丙辰紀行は羅山が元和二年に江戸から東海道を通つて關西地方へ旅行した時の記錄で到處で名勝舊蹟を訪ねて、その有樣や所感を述べたものでその金澤を訪ねた處に、

『北條氏天下の權をとる時文庫を建て、金澤文庫といへる四字を、儒書には墨印をおし、佛經には朱印をつきて納め置ける』

と記してゐる。又羅山の詩に

『越州刺史拔ㇾ籤攤、金澤舊蹟今尙殘。開ㇾ卷烏糸襴外色。儒書印墨釋書丹。』

といふがある。從つてその子の林春齋（恕）も本朝通鑑に

『建治二年冬十月廿三日越後守北條實時卒干金澤別業（年五十三金澤與鎌倉接隣在武藏國六浦莊號稱名寺）實時好學寥書、稱名寺內建文庫納之、以儒典佛經爲兩部、各貼金澤文庫之印、以墨朱分之、（儒典者貼墨印、佛經者貼朱印）』

と記してゐる。林羅山や春齋の樣な大學者が書いた事であるから、その他の學者は何れも無條件に、この說を受入れて、皆言合せた樣に、儒墨佛朱の說を唱へたものであらう。二三の例を擧げて見ると

「北條九代記」には『儒書には墨印佛書には朱印卷每に押されたり』

「新編鎌倉志」には『儒書には墨印佛書には朱印を押す』

「本朝語園」には『儒書ニ墨印佛書ニハ朱印ヲ押ス』

「東海道名所圖繪」には『儒書には墨印佛書には朱印を捺す』

「典籍秦鏡」には『儒書には墨印佛書には朱印を用ゆ』

「金澤文庫考」には『但シ佛ハ朱ヲ以捺ス』

「江戸名所圖繪」には『儒書には墨印佛書には朱印を用ゆ』

「和漢三歲圖繪」には『儒書則墨印佛書朱印』

「柳庵隨筆」には『儒書には墨印佛書には朱印を捺す』

所で金澤氏の後裔である金澤安貞撰文の寬政六年の金澤文庫古址碑文にまでが、『嫡子亭之學、內外分典籍、印章異朱墨』と記されるやうになつた

そして近く出版された辭典類にも、皆この說を採用してゐる。

「教育大辭典」には『多く佛書には朱印、儒書には墨印を用ひたりき』

「日本百科大辭典」には『佛典には朱を捺し、儒書には墨印を捺せり』

と載せられてゐる。

正誤

前號二段、三五行目
室町時代ハ實時時代ノ誤植

參觀記

千葉縣農會立　蘇我家政女學校

高津實女　新川正一

勤勞教育、作業教育、勞作教育、體驗教育の叫びは隨分久しい。そして昨今特にその高潮を見る。然しそれ等の大部分に於ては學校と家庭とが餘りに區別され過ぎてゐる。子どもは二重の生活をする。學校が建設的なら家庭は破壞的、家庭が建設的なら學校は破壞的であるともいふべき矛盾は掩ふことが出來ない。生活即教育の立場から言へば如何しても此の矛盾を除去しなければならない。

此の教育本質上の缺陷を除いて眞に勤勞作業、勞作體驗教育の目的を果すものは古にありては松下村塾、今に在りては玉川學園其地には餘り多くを聞かぬ。殊に我々は富有階級の子弟の爲のさういふ學校を多少は聞くけれども、大衆の爲の施設、特に中堅をなす農家の主婦の爲のさうした學校に至つては殆どきく所がない。

かくの如き意味で千葉縣農會立家政女學校は我々の注意を惹くこと充分なるものがある。我々は八月廿九日の殘暑最も酷烈であつた日に同校を參觀した。我々は同校が果して眞の意味で體驗教育をなしつゝありや否や、又これは一部富有階級の爲のものに非ずやといふ二點に特に關心を置いたのである。

千葉驛で汽車を捨てたのが十時、これから銀バスで時々東京灣の光波を眼にしながら走ること十分、早くも千葉市外蘇我町に入つた。プーンと鼻をつく嗅氣に思はず鼻をつまむ。これが漁師町蘇我の香かと考へたが、後できくと道路の兩側に澱んだ溝の腐つたのと、馬鈴薯から澱粉を取つたカスを乾したものから來るものとが、漁業町特有の香とのカクテルであつた。鼻をつまんで走ること五分、蘇我姬神社（社前の石碑には蘇我比呼神社とあつた）の前で自動車を降りた。町は不潔な淋しい田舍町――といへば、凡そ何人にも想像出來よう。神社の境內は非常にきれいであつた。雜草一本塵一つもなく、きれいに掃き淸められてあるのを異樣に感じながら、これは又おそろしく舊めかしい建物――即ち家政女學校の門前に立つた。地震で新しくなつてしまつた京濱地方の學校を見なれてゐるものには想像はつかないだらう。先づ明治初年の小學校――とでもいつたら幾分手懸りもつくだらう。建物等はどうでもよろしい。我々の目的は他にある。直に玄關に赴いたが誰もをらぬ。ウロ〳〵してゐると右手の方

住宅と思しき所に小さく「受付」とある。刺を通ずると喜んで玄關から招じ入れられた玄關子實は此の學校の主任教諭鹽田せつ先生である。時正に十時半。

先づ同校の設立の目的から段々と承る。同校は昭和四年の創立である。パンフレットによると次の如く書かれてゐる。

一、創立の動機

農村ノ改善發達ハ農村人ノ開業自覺ニ俟ツベキヤ論ヲ要セザル所ナリ。今ヤ農村ハ農業ノ經營ニ家政ノ刷新ニ生活ノ改善ニ一日モ女子ナクシテ實在セズ。女子ノ共同ナクシテハ全然成立セザコルト餘リニモ分明ナリ然ルニ何ゾヤ今日迄ニ於ケル女子ノ農業ニ關スル智識ノ低級ナル農村生活ヲ理解セザル之レ農業ノ進步發達ヲシテ竣巡セシメタル有力ナル理由ノ一タラスンバアラザルナリ。之レ全ク女子ノ農業教育農村ノ實生活ニ適セル指導機關徹底セザルコト最大原因ナリトス。

本縣ニ於ケル女子教育機關ハ當局ノ施設ト縣民ノ自覺ニヨリ逐年發達シ男子ノソレニ比シテ決シテ遜色ナキ迄ニ形式ニ於テ備ハレリトス雖現行制度ニ於ケル高等女學校ハ大多數ノ階級子女ヲ目標トスル專門農家ノ子女教育機關トハ固ヨリ見ルコトハ能ハザル又當然ナリ。尙地方ニ於テハ補習學校女子部ノ完備經營セラレツヽアルモノ多カルベシト雖主トシテ農閑期ニ於ケル極メテ短期ノ經營ニシテ其ノ必須教科タル裁縫家事ノ如キモ農村生活ニ立脚シタル教育的色彩ニ乏シキ感ナキ能ハズ。カヽル農村子女教育ノ現狀ニ鑑ミ又農人トシテ女子トシテノ自覺ニ出發スル現實ノ要求ガ本校設立ノ主旨ニシテ農村各自行事ヲ基調トシテ一切ノ教科內容ヲ派出シ之レガ實習體驗ヲ尊重シ農繁期ニ於テ家庭實習ヲ課シ殊ニ時局ノ經濟問題ニ鑑ミ學資ノ少額ヲ計リ本校ノ眞使命タル學校生徒ヲ通ジ農村生活ノ改善興村振業ヲ期シ以テ農村ノ現實ニ立脚スルト同時ニ一方現代文化ヲモ取入レ農村子女トシテ必要ナル智識ト技藝トヲ授ケ併セテ婦德ノ涵養ニ務メ女子本來ニ興ヘラレタル天分ヲ果スタメニモ男女協調ノ責任ヲ完フセンガ爲ニモ尙又美ハシキ母性愛ヲ續ケルタメニモ一言ニシテ言ヘバ新時代ノ良妻賢母タラシメン　爲ノ教導ニ努メ以テ經濟的ニ想思的ニ農村ノ向上發達ニ寄贈スル中堅子女ノ教育機關タラシメントス。

二、教育綱領

一、國體精華の發揚
一、興村振業の實現
一、家庭生活の改善

玄關の左側に校旗が酷熱の空に飜つてゐる。これは三種の神器を承し國體の大意を現はし之に鏡を配し農本立國を表示したもの、又三本の赤誠溢るゝが如き線は房總三州半島を意味し、國土愛鄕土愛の精神を旺盛なうしむる趣意であるとのこと。國旗の立つてゐる學校は隨處にある。然しかくの如く校旗が通常日に翩翻と飜つて同校の精神を統一してゐる學校に接するのは珍らしい。

玄關には天照大神、蘇我比呼神社の御璽が安置され、榊が供へられてゐた。每朝生徒は神社に禮拜をするのである

其他には綱領第一の爲の施設はない如くである。別にりくつはない。せつせつと働いて家のため鄕土のため盡すのが此の學校の信條であらう。どこまでも實踐的である。

三、教育道場の概要

一、校舍　蘇我町小學校の舊校舍を借受けたもの。玄關の正面が五坪位の教員兼應接室其の右手に四間十間の疊敷の教室

玄關の左手にも同じき教室、共に裁縫兼作法室であるが、「櫻の間」といふ名が人口に見えた。家事教室が其の室に續いて同樣の廣さで食堂兼用である。

それにつゞいて臺所、浴場、整容室、洗濯場等が附屬されてゐる。

この他に先生のお室ともいふべき小室があつた。

これだけを合せて一一五坪。如何になんでも手狹である。そこで校舍の直ぐ前の蘇我町漁業組合の階上（6×10坪）を借用して普通教室に充當してゐる。これで七十名の生徒の教育場としては先づ不足はないといへよう。

二、寄宿舍　校舍に隣接した普通の住宅二軒。それと學校の裁縫教室とが寄宿である淸和寮濟美寮精華寮等と呼ばれてゐる。各々に職員が同居

三、農業實習地　校舍から約二丁。二反五畝の田畑、それに豚舍がある。別に學校敷地內に兎舍がある。實習地の中央には「我等の樂園」といふ柱が日々生徒の心を新にし慰勵ましてゐる。

四、教科について

1、本科の教科目は次の通り

修身	三五時	
國語	三五	
數學	三五	
裁縫	六一三	
家事	二一〇	
經濟	三五	
農業	二四五	
公民	三五	
體操	一七	

土曜は課外講演に充て專門家の講演並實習をなす

農業は作物、園藝、土壤、肥料、養畜、農業經營等に分れ實習を重視する。兎には、櫻子、桃子、梅子、菊子等豚には太郎、次郎等と優しい名がつけてある。女性の慈愛がそこにある。

2、生活の一切が家事科で統一されてゐる。農村の衣食住を基調として實驗實習を行ふ。殊に作業服は同校自慢のもの紺のメクラ縞で在來の農業服に洋服を加味した新案、早く出來て、丈夫で、働きよくて體裁がよい。

3、課外講演も同校の誇るところ、縣農會の人たちが獻身的に來校し、面倒を見てくれる

五、生活について

1、寄宿舍

同校の生徒は全部寄宿舍に入るといふのが原則である。寄宿舍といつても普通の概念とは異るものである。これが嬉しい點である。生活は一元であるべきだから。生活は左の六部から組織される自治制によつて營まれる。

衞生部、風紀部、社會部、經濟部、圖書部、整理部、かうして生徒は、家庭生活並社會生活のあらゆる部門の實驗練習鍛錬をなす機會を豐富にもつわけである。炊事は經濟部の仕事、購買部としては泰安消費組合が組織されてゐる。社會部は「額に汗」して道行く人々に麥湯の無料奉仕或は來客の接待等をもする。便所の掃除や洗濯の監督等は衞生部の仕事といつた工合。

2、休暇　日曜や祝祭日に休むのは別に變りもないが夏休は僅に十日間である。農家の中堅婦人としてガツチリやるのには暑いからといつて休む譯にはゆかないといふ精神が嬉しい。やれキヤムプ、海水浴等とは此の學校の生徒にとつては空ゆく雲の如くに關りがない。

3、實習　學校に於ける實習は既に說いたが別に家庭實習といふのがある。これは左の期間家庭でそれ〴〵の家事を新な見地から見直させる仕組らしい。此の間教師が巡廻指導する由。

第一期　六月一日―三十日
第二期　十月廿五日―十一月十九日

六、修業年限と入學資格

本科　一年、高小卒業生
家庭一年本、科卒業生、女學校卒業生。

話を少し戻す。我々が學校に到着したのが十時半、一わたり鹽田先生からお話を拜承して各室を見た後、家事室並に食堂に行つた。學校全體が頗るお粗末であるところへもつて來て、此の室は又一段とお粗末であるのに驚いた。然しよく見ると實によく手が入つてゐる。心が行き屆いてゐる。掃除、道具の配置、衞生上の注意等これにも亦驚かされた。入口の繩暖簾が珍らしく、嬉しい。室の一隅には蘇我町の日用品の共の日の値段表が揭げられてゐる。これで每日買出しが行はれる由。此の學校のやり口はどこ迄も地に足がくつついてゐる。學校生活と社會生活とがガツチリ取組んでゐる。折柄十一時の鐘を相圖に當番の生徒がやつて來て仕事に懸つた。

次いで風呂場をのぞく。設備には何も感心するところはないが、溫度計が目にとまつた。

（四頁へ）

風呂の溫度には少々面白い想出がある。ある日本の學者が獨逸に留學した時のこと日本人であるが故に彼氏ホテルに在りて女中に風呂を注文した。すると女中は「溫度は？」と尋ねたものだ。彼氏一流の學者なれど此の返答には閉口したとか。此の學校の生徒は、此の溫度計で熱いの、ヌルイのと駄々を言はせないと見える。いや、此の溫度計一本からもたらされる人手及燃料の能率を考へる時に、ホントの文化生活をおもふ。此の溫度計一本に對する感心は無限である。

これで校内一巡、それから前記の實習地「我等の樂園」に穗に穗が咲いた狀況を見る七十の乙女の愛を一身に集める豚公太郎どん次郎どんの幸福を美む。桃子さん菊子さん等の兎の顏は乙女の慈愛が乘り移つたか極めて慈悲深い相。

正午に近づいたので我々は辭し去らうとすると、是非、生徒の作つた食事を……といふ鹽田先生の强つてのお言葉に甘へて、御馳走になることに度胸を決める。やがて我々の前にもたらされた晝食は、胚芽米の御飯に卵のお汁、野菜のオムレツ、いかの煮付、カロリ滿點で而も美味、食堂では正午キツカリに生徒が集つて樂しく食事を始めた。僅な當番がよく一時間で用意が整へられるものと大へん感心してしまふ。食後の話に、生徒の出身分布狀態をきく。縣内のあらゆる地方から來てゐるといふ。なる程壁の千葉地圖に分布狀態が朱點で記入されてあるのを見ると其の通りだ。鹽田先生の曰く、どうも山の地方から來た子には底力がありますね、どうかして此の學校の生徒全部に此の底力をもたせたいものです、と。

同行のY氏これに共鳴、ソラさつき僕が話した通りだらうどうも英雄は平地からは出ない。文化に浸潤されると人間に力がなくなつてしまふ。

卒業生も大分出來た。蘇我姫神社の神前で神式結婚を擧げて土地の人を驚かし、學校教育の徹底を如實に見せた人もある。その時の式服がこれ亦同校の自慢もの。

兎に角、此の學校のやり方はリクツでない。あく迄實踐的だ。學校家庭一如の生活實踐だ。我々は此の一日の參觀に於て嘗て味つたことのない教育的滿足を感じながら辭去した。

勃興を來たさしめんと努めて居るのであります。

斯くして低金利の資金と割安なる勞働とに依つて生産せられましたところの物貨は安價な上に爲替安に拍車を加へて驚くべき廉價をもつて盛んに海外市場へ輸出せられることになつたのであります。ところが海外市場に於きましては自國産業保護のために夫々關税障壁を高くしてダンピング税に等しきところの高率の關税を徵し日本品の輸入を防遏するに至つて居るのであります。それが英國、米國、フランス、支那、印度其他の貿易に於きまして顯著に現れつゝあるのであります。昨日の東京日々の夕刊に載つて居た樣に日本品が無税港たるシンガポールを經て盛に印度内地へ輸入せられてゐると云ふのは如實にこのことを物語つて居るのであります。

生産物の捌口がなくなれば生産は過剰となり、自然生産を手控へしなければならなくなるのであります。その結果として、企業の縮少となり、工場の閉鎖となり從つて産業資金が内地市場に激增し沈滯して參りますので貨幣價値の下落となり、物價の騰貴を招來せしむるに至るのであります。

日本銀行に於きましてはインフレに依るところの右の如き影響を恐れまして、オープンマアケツトオペレーションの方法に依り適度に之を調節して居ります。然しこれには自ら一定の限度があるのであります。それで今後毎年この赤字公債に依るところの紙幣が增發せられます時に於てはこのオープンマーケツトオペレーションの手段も行詰りを生ぜざるを得ざることとなるのであります。その結果爲替相場の急激なる慘落となり、物價は極度に騰貴して參りまして國民の生活は甚大なる脅威を受けるやうになるのでありまして、こゝに全く收拾すべからざる結果を招來する惧があるのであります。

（つゞく）

現代思想の批判

横濱思想係檢事　井上貫一氏講演

私は只今御紹介を受けました井上でございます。こゝに掲げられてある通り現代思想の批判と云ふ事に就て卑見を申述べて見たいと思ひます。

歐洲大戰は世界各國の政治經濟其他凡ゆる方面に甚大なる影響を及ぼしたのでありますが、特に思想方面に於て其影響の顯著なるものがありました。

政治上に於きましては彼のソビエツトロシアの出現となり共産主義をイデオロギーとして世界各國にその羽翼を延ばさんと努めて居ります。次でイタリーはムソリニズム所謂フアシズムをイデオロギーとする國家形態を執るに至りまして、國粹主義、イタリー第一主義を鼓吹致して居るのであります。

又最近獨逸に於きましてはヒツトラリズム所謂ナチズムをイデオロギーとする國家形態を執るに至りまして之亦國粹主義、獨逸第一主義を標榜致して居ります。

孰れも民族的自覺に外ならぬのであります。

英米、佛其他の國に於きましても大いに是等に刺戟せられまして政治上民族第一主義を標榜するに至つたのであります。

次に經濟上に於きましては自由主義をイデオロギーとする資本主義制度が高度に發達致しまして金の偏在、生産需給の不均衡となり將に行詰らんとする情勢を呈して居るのであります。各國はこの危機を打開する爲めに狂奔し居ります。軍縮會議、世界經濟會議は勿論金輸出の禁止、貨幣制度の改革、インフレの招來關税の障壁其他等々皆之を物語らざるものはないのであります。

斯くして世界は政治上、經濟上、其他凡ゆる方面に非常時局を現出して居るのでありまして我國も亦この世界的波動に、棹さして居ることは勿論のことであります。

我國に於きましては今や經濟上、外交上、思想上に重大な危機を孕んで居るのであります。

（一）我國は數年來經濟的不況のために國民の多くは、その收支相伴はず生活の脅威を感じて居るのであります、それが年毎にその深度を加へて居る有樣であります。それは給料其他の支拂の猶豫、又はその不拂となり、工場等の企業の閉鎖となつて現れて居るのであります。

政府はこの經濟的不況を打開して好景氣を齎さんがためにインフレ政策を執るに至つたのでありまして、そして今春の帝國議會に於て二十二億有餘萬圓と云ふところの尨大なる豫算案を可決致しました、その歲入の不足分たる十億餘萬圓は之を所謂赤字公債をもつて支辨することになつたのであります。而して日本銀行をして全部之を引受けしめて兌換券の增發をなすに至つたのであります。

加之、日本銀行及郵便貯金の利下げを斷行致しまして、一般市中銀行をして之に追隨せしめ以つて、資金の潤澤と金利の低減を誘致して産業の

親燈漫語（一）

◎横須賀村の人の話

横須賀村と云つても、決して、我が湘南の軍港横須賀市の昔を指すのでもなく、又遠州横須賀町の古へをいふのでもない。

こゝに、横須賀村といふのは、愛知縣下三河國吉田在の横須賀村のことである。

頃春筆者は、此の横須賀村の人と會して、一夕を、元祿義擧について物語つたが、其の人は、異常に緊張した顏を筆者に向け熱心に左のやうなことを說いた。

「我が横須賀村は、幡豆郡の吉田町と共に、往昔、吉良上野之介義央の領地であつたが、我々の祖先は、上野之介を神の如く崇めてゐた。それは、義央が誠に慈悲深い名君で、およそ横須賀村の住民は、いかばかり、彼の仁惠に浴し、恩澤に潤うてゐたか知れないからである。

其の巨細は、吉良家の菩提所片岡山寺藏寺に藏する文獻に徵しても明らかであるが、尙ほ、同寺藏の元祿事件に關するものを調べて見ると、勅使の接待役は淺野家としては、元祿十四年が始めてゞはなく、是より十九年前に於いて已に長矩の祖父が、此の役をふられてゐるのであるから、若し長矩にして、沈着、大度――否、々、普通の人間ならば、傳統と因習とを尊重すること、殆ど思ひ半ばの當時に、其の式法の全體を心得てゐない筈はない――よし又、一歩を讓つて、彼が其の式法に嫻はず、何もかもがはじめてだつたとしたら、物質偏重の元祿時代、玉帛を以つて禮としてゐた當時に在つて、同じ接待の總司令たる吉良上野之介に、辭を卑うし、禮を厚うして赴かねばならなかつた。

而して彼は終に其の擧に出づることなく、事を破滅に導いて行つた。

正史は元より、大衆的に忠臣藏として訴へられたものも、淺野長矩忍傷の原因を、上野之介の貪婪非道に歸してゐるのは、失當のことだと思ふ。

傳說の赤穗の名君淺野内匠頭長矩！實際の横須賀村の仁主吉良上野之介！これを並べて見たらまだ何れに團扇が上るかわかるまい。

國賊クロムウエルを大愛國者クロムウエルに變更したカーライルの筆こそ、我々が、上野之介の爲めに、出現を翹望して已まないのだ」

と、語り終つて憮然としてゐた。

身贔負、土他贔負。祖先贔負、とのみ貶し去るには、あまりに現實味があり過ぎる。記して以つて識者の參考とする。

◎人肌の如來

平泉の中尊寺は、人も知る、其の昔、奧州の大勢力藤原氏の建立にかゝつたもので、堂塔四十、坊舍三百の、善美を盡した大伽藍であつたが、彼の文治五年八月、二十萬の大兵を率いて、泰衡討伐に來つた源頼朝の兵燹には免れながら、桑滄の變、やうやく頽廢の極に達し、今はわづかに、中尊寺の本坊と、一山の三十六坊とを餘すのみになつたが、それでも、尙ほ光堂（金色堂）の如きは（芭蕉も「奧の細道」に此の堂のことを書いてゐるが）元祿時代と大して異ることなく、ありし榮華を物語つて、内容も、建築も、盡く國寶である。

人肌の如來は、此の中尊寺一山の秘佛で、國寶中の國寶だ。

高さ二尺五寸一分、臺座の高さ一尺三寸、頭には、寶相華透彫の寶冠を戴き、手には智拳の印を結んだ安座の像であるが、佛身の背部全面を削りなして、浮彫式に、厨子にとりつけてあるのも珍らしい。

これは、運慶作とも云ひ、又否とも云はれてゐる。

兎に角、厨子の扉を排して、一寸金輪の此の坐像を拜するものは彼の中宮寺（大和法隆寺）の如意輪觀世音とは、全く別の意味の崇高と慈悲とを感ずるのである。

作者は運慶にしても、誰にしても、其の當時の尊貴の一女性をモデルとして製作したことは論ずるまでもない。

「佛身肉色たるが故に人肌の如來と稱す」とは云はれてゐるが、此の像を拜するものは、直にそこに母を思ひ、母性を偲ぶ、母なる神を懷ふのである。

◎佛母麻訶摩耶

母なる神で思ひ起すのは、佛母マハーマーヤのことである。マーヤは、淨飯大王との結婚後、久しい年所を經て、やうやく大聖世尊の母となり、而も釋迦誕生後、わづか七日にして世を去つたと傳へられてゐるが、我々は、世尊を思ふ時に、直にマハーマーヤを懷はずにはゐられないのだ。

キリストの母はマドンナとして繪畫、彫刻、詩等の藝術の對象となり、キリストの敎のあるところ必ずマリヤ禮拜の風があるのに、ひとりマハーマーヤに、それの尠いのを遺憾としてゐたところ、偶々城南（東京の）荏原區の小山に佛母山麻耶寺を見て、大いに意を强らしてのたある。

此の寺の本尊は、無論麻耶夫人の像で、釋迦は、却つて左側の小堂に祀られてゐる。

攝津の麻耶山は、其の名の示す如く、マハーマーヤを祀つたところで、彼處の忉利天上寺は麻耶夫人の像を本尊としてゐるのだ。

傳に依れば、千有餘年の昔、彼地の大德が、一刀三禮の儀を以つて、印度特產の牛頭栴檀の靈木を材として、佛母の像二軀をつくりナーランダに安置したのだと云はれてゐる。それが、支那から朝鮮を經、日本に致されたのを、守屋の變に、難波の池に投ぜられたものであらう。後これを綱する人あつて、一は攝津に、一は遠く武州に送つたのだと云ふことである。

既に十世紀以前に於いて、此の母性尊重の刀を揮つたものあることを思ふと、我々は一層意を强くせずにはゐられない。

◎タヂ・マハール

凡そ女性の陵墓にして、其の規模の雄大、輪奐の壯麗なるものは――？と云へば、印度のタヂ、マハールに若くものはあるまい。

汽車で印度を旅行するものは、アグラ市に入る前に、ジュムナ河の岸にいよやかに聳え立つ白く輝く大きな建物を見るであらう。それが即ちタヂ・マハールである。

世界的征服者帖木兒の五世の孫バベル大帝は、一千五百二十八年に、中央亞細亞から、北印度の五河地方に侵入し、パーンバットの大戰に勝つて、當時印度に君臨してゐたロヂー朝を滅ぼし、ラージプト族を破り、モグール王朝の基を建てた（モーグルとは、モンゴルのこと）

バベルの子フマユンの時代は、此のモグール王朝もさのみ振はなかつたが、其の子アクバル大帝に至つては、内治外交共に未曾有の成績を擧げ印度は實に、其の殷賑の絕頂に達した。

アクバル大帝の孫シャージャハーンも亦、モグール王朝の英雄君主の一人であつたが、タヂ・マハールは、此のシャージャハーンの創建にかゝるものなのだ。

シャージャハーン大帝の愛妃をマンターヅ、マハールと云つた。此の妃が、ふとした風邪の心地から、枕も上らぬ重病に陷つた時、シャージャハーン大帝は、いかばかり、其の心を勞し、其の體を苦しめて、愛妃の爲めに力を盡したか、それは、全く想像以上で、涙を誘ふ挿話をある位だつた。

しかし、其の甲斐もなく、マハールは崩御し、シャージャハーン大帝は、其の愛妃と、とこしなへに、幽明境を異にして了つた。

シャージャハーンの歎きは、餘所の見る目も痛はしい程であつたが、やがて、彼は男らしく涙を拂つて、愛妃の爲めに一大靈廟を築き、いとせめての心ゆかしとしたいと發願したのである。

十八ケ年の日子と、數千萬の財と――かくして、タヂ・マハールはジュムナ河の岸に、巍然として聳峙するに至つた。

こゝに詣するものは、いかに大膽に白大理石が使用され、いかに巧妙に白大理石が藝術化されてゐるかを驚歎せずにはゐられないであらう。

シャージャハーンは、尙ほ別に自らの爲めに、黑大理石の靈廟を築き、二つの陵墓の間に白銀の大橋を架し、盡未來際、戀の完成を謳歌せしめようと、しきりに、其の工事を急いだのであるが、不幸中道にして幽閉の身となり、志を遂げることが出來なかつた。

今、大帝の靈は、此のタヂ・マハールの左側に安らかに眠つてゐる。

シャージャハーンにして見ればこの方が却つて本懷であるかも知れない。

タヂ・マールの建築は、決して純印度式のものではなく、波斯の樣式を多く取り込み、又イタリーのフレンチヤ建築法を澤山斟酌してゐる。

燃ゆるが如き熱地の太陽の西方に春く時、人は、タヂ・マハールに、女性と云ふものゝ偉大さを思はずにはゐられないのである。

縣立高女校母の會主催

母心の社會的進出（承前）

山田わか子女史講演（文責記者）

即ち母心は人間生活の進歩の源であり、この世の中を靄す所の太陽であります。これを社會全般に働かせなければならない、このことを私は強く主張するのであります。

私には子供もあり孫もあります、この子供や孫を如何にして立派に育てるか、如何にしたならば世の中の役に立ち國家のお役に立つべき人間になるかと子供を思ふ母心それは私一人の問題であり、全母性の問題であります、たゞに母性だけの問題でなく全男性全社會の人々に眞剣に考へて貰はなければならぬ問題であると思ひます。

女が男と同樣に經濟的に働かうとすれば今のロシアのソヴエート共産政治の如く子供は全部國家で育てることになります、國立育兒院と云ふのがあつて、そこで育てることになります。

私に言はせれば人間の子供はそんな安つぽいものではない、豚や蠶を飼ふやうにぞんざいに扱はれるべきものではないと思ひます。

女學校の教育も先づ家庭婦人として立派な主婦となり得るやうに心掛けなければならぬと思ひます。

最近女性の職業教育と云ふことがやかましく言はれて居るやうでありますが、これも私に言はせれば、結婚後の家庭生活に於て、若し不幸にして夫に間違ひのあつた場合又一家の經濟生活に支障を來たした場合の用意のためにこそ女性の職業教育が意義を爲すのではないかと思ひます。

此の點は『エレンケイ』も言つて居ります。

『山の立木にもそれ〴〵使ひ途がある山に置けば、もつと有益な、もつと立派な方面に使へる木を無理に切つて電信柱にするやうなものだ、立派に家庭婦人として役立つ可能性のある女性を無味乾燥な電信柱として、男と同じやうに經濟生活をさせるのは如何かと思ひます。

經濟的生活は男に任せて置くべきだと思ひます、女性は他にもつと重要な使命があることを忘れてはならぬと思ひます。

この女性の職業教育と云ふことに關聯して私は母性保護法の制定と云ふことを痛切に感じて居ります。

私の近所に婦人共同會と云ふのがありまして、三百五十人の會員を擁していろ〳〵と仕事をして居られます。

この會員の方は大部分世帶をもつて居られる方であります。今迄幸禍に暮らして居られた方が夫に死別れて、子供を抱へて斯うした會に入つてか弱い女の腕で一家の生計を立てゝ行かうと努力される實に泪ぐましい事例が數々あります、子供を家に殘して働く母親の胸中を思ふ時何んとかしてこの子供を母の膝の上に抱かせて置きたい、これはお家で保護して貰ひたい、母性保護法の制定を私は痛切に感じます。

女性が立派に參加するやうになつた時第一の仕事はこれではないかと思ひます。

今女學校に於て職業教育と云ふことが問題になつて居るのは、若し夫に間違ひがあつた時子供を抱へて生活に困るその時の用意に何か女の手で出來る經濟的收入を考へなければならぬ、とお考へになるからであります。これは經濟的に母性の位置が保護されて居らぬからであります。

眞面目に家庭の主婦として子供の母として働いて居て思はぬ不幸に見舞はれた時國家がそれを保護してくれゝば母性は安心して母の使命に沒頭することが出來ると思ひます。

斯うなれば、經濟國難も思想國難もなく現在社會のいろ〳〵の難問題も案外他易く解決出來るのではないかと考へて居ります。斯う云ふ私達の心持が今の政治家達には、殊に貴族院の人達には通じないのであります。

女權主義的の立場から言つて居るやうに考へられて居るのであります。

昨年も婦人公民權の問題が大分有望になりまして、衆議院を通過して貴族院の委員會を通過して本會議にまで提出されたのでありますが殘念ながら握潰されてしまつたのであります。

その時の反對理由として婦人は兵役の義務に服することが出來ないのに政治に參加することを要求するのは不都合であると云ふやうな意味のことでありました。

私はその時反對論をされた九鬼さんに會ひまして一言言つて置きました。

『婦人をロシアのやうに兵隊として使はれることは婦人の性能を無駄に使はれることであり、不經濟のことです、私達は兵隊として戰場に出て働きこそ致しませぬが、その兵隊を生むのは女性であります女性の使命に對して理解がなければ從つていゝ兵隊は出來ませぬ、』と言つて置きました要するに私の言ふ女性の社會的進出と云ふことは、婦人の母心の社會的進出を云ふことであります。

ですから例へば私達の四ツ谷區婦人會は區の母であります、東京聯合婦人會は帝都を保護する母心であります。私の主張は徹頭徹尾母心の社會的進出であります。これを政治について言つても、家のない所に村はない村の政治は家庭の延長であり、村が町となり、郡となり、市となり、縣となる、村政も町政も市政も縣政も一國の政治もみなその元はお互の家庭の延長であります。

家庭の政治を司つて居るのは主婦であります、この意味から言へば政治は寧ろ主婦の仕事であるとも言へるのであります。

ですからお互の家庭に都合のいゝやうに政治と云ふものは施かれなければならぬと思ひます。

言を換へて言へば國民の爲の政治でなければなりませぬ國民の幸福を圖る爲の政治でなければ眞實の政治とは言へませぬ、その國民は何處に住んで居るかと言へば家庭に住んで居るのであります。經濟的の仕事は男性の領分であります、言葉を弄して言ふのではありませぬ、人類生活の進化進展は徹頭徹尾母性の双肩にかゝつて居るのです。

そこでこの母性の使命を完全に果さうとする時に於て家庭を延長して社會的に進出して行かなければならないと思ひます。

今の政治が家庭の政治の延長として眞面目に考へられた時初めて立派な政治としての効果を擧げることが出來るのではないかと思ひます。

家庭の政治に無關心な人は町の政治も市の政治も縣の政治も國の政治も分らない、今の政治が家庭を離れた政治であるから腐敗し墮落して行くのではないかと考へられますのに斯うした心持が今の政治家達に多少でも分つて頂ければ婦人參政權と云ふことに對しても少しは態度が變つて來るのではないかと思ひます。

併し私共の力で長い間男性中心思想で凝つて居る今の政治家達を動かすまでには未だなか〳〵遠いものがありますこの點我々は大いに努めなければならぬと思ひます。

女性も結婚して子供が出來ない中はたゞ一人の男と女が一緒になつただけのことであつて、子供が出來て初てこの子供は自分等の生命の延長だと考へる時に妻の姿が崇高に見へ尊敬の念がもてるやうになると思ひます。

朝日新聞社の家庭相談部に言つて來る大部分は結婚後子供が二、三人出來て夫が藝者や女給に夢中になつて家庭を顧みないと云ふのが多いやうです、其他種々と家庭的の不幸に就いて相談される人が隨分澤山ありますが新聞のことですから代表的のものを一つ採つて他は沒書にされてしまふ、新聞面に現れないもので中には返事の出せないやうな氣の毒なのが澤山あります。

夫と別れて家財道具を賣つて友人の家に厄介になる、併しいつまでも厄介になつては居られないので、どうにか工面して小さい所に間借して子供を育てようと思ふ併し身につけた有ゆるものは賣拂つてしまつて晩に食べるお米がない、斯う云ふ母性の所にはお米を持つて行かなければ、手紙では解決が出來ないのです斯うした氣の毒な人達の爲に『プール』さんは母の家と云ふのを造られてお母さんと子供を收容して居られます。

併し個人の仕事としては多くの人を收容することは出來ませぬ、恐らく要求の萬分の一にも當りますまい。

英國では斯う云ふ問題を如何に扱はれて居りますかと尋ねました所『プール』さんは意氣揚々として英國では十年前に婦人參政權を得てさうした問題は全部解決が出來て居ると言はれるのです、どう云ふ風に解決されたのか聞いて見ますと。

無責任に妻子を捨てゝ他の女と同棲した場合何處の地に逃げても男は警察に擧げられる、さうして行政裁判所で查定して男の働く賃金又は收入の中から妻子の生活して行けるだけの金は送つてくるやうになつて居る、若し警察の手で逃げた夫が發見されない場合は慈善事業團體の手に依つて保護されることになつて居ります。

斯うしたことも英國の婦人が參政權を得たから解決が出來たのであります、長い間いろ〳〵とお話を致しましたが要するに女性生活、母性の家庭に於ける仕事が社會生活の中心であり、母心の尊重が人間生活の源であり、この母心を社會的に進出させて社會を淨化し人間生活の向上を圖らなければならぬと云ふことであります。これで私の話を終りと致します。（終り）

文責速記者　村井茂樹

研　究

新讀本と綴方（承前）

（尋一初期に於ける綴方）

神師附小　小島忠治

（3）

デカケマシタ。　一六頁
エヲ カキマシタ。　一九頁
カヘリマシタ。　二〇頁
ワツト ニゲテ イツタ。　二九頁
パツト キエタ。　三〇頁
オザシキ ヘ トホシマシタ。　三五頁
ゴチソウ ヲ シマシタ。　三六頁
ヲドリマシタ。ツヅラヲアゲマシタ。　〃
ニイサン ガ イヒマシタ。　三八頁
サガシテ キマシタ　〃
ハコビマシタ。ツチヲイレマシタ。　三九頁
ツクリマシタ。コケ ヲ ツケマシタ。　四〇頁
ハシモカケマシタ。ホメテクダサイマシタ。　四一頁

……等過去型の文章の多いことも、氣をつけてみると氣付く。元來兒童は過去的表現を多くとるものである。この點從來の『カラスガ キマス。スズメ ガ キマス。』と云つた樣な表現形式をとつた文章からみると、新讀本は兒童文によほど近い形式をとつてゐる。それだけまた兒童には讀みやすい親しみの多い文章であると考へられる。

（4）

サイタ サイタ　二頁
コイ コイ　四頁
ススメ ススメ　五頁
バンザイ バンザイ　七頁
トマレ トマレ　八頁
ハシレ ハシレ　九頁

その他十二頁ウシ、十三頁ヒバリ、十四頁カラス、十五頁ツキにしても、亦三十四頁のシタキリスズメ、オヤドハドコダ。シタキリスズメ、オヤドハドコダにしても文章に反覆があつて、動的な氣持よいリズミカルな美感を與へ、兒童の心理によく合致した極自然的な表現をとつてゐるので、この期の兒童には知らず知らずに口ずさまずにゐられない所の魅力をもつてゐるものと思ふ。

……◇……

尙新讀本が兒童に喜ばれてゐる一つとして忘れてならぬのは色刷の挿繪である。色刷の挿繪は綴方生活にも大きな役割を演じてゐる即ち挿繪をよくみつめることによつて、文章の背景が理解され、教材より次次と想像が發展して、兒童の綴方生活は生々と展開せられて行くのである。

（三）

次には以上述べました新讀本を中心として兒童の心理、兒童の國語能力に即して、私のとつた尋一初期に於ける綴方指導の實際について述べることにしよう。

1 綴方以前に於ける綴方的指導（四月——五月）

讀本教材では二頁より十五頁まで、こゝには難しい言葉遣いや敬語は一切省略されており、その題材は季節に自然に人事に玩具に、廣く兒童生活の中から取材せられ、從來の教材とはよほど趣をかへて、『コイコイシロコイ』『ススメススメヘイタイススメ』……等にみられる如く非常に動的な情景を描き、誠に素直な無邪氣な明朗な童心のあふれてゐる十三篇の童謠風な教材からなつてゐる。

——こゝでは主に生活經驗や繪畫をみての言語發表及び文の讀みに伴ふ鑑賞指導、文の書取りや、既習の文字語句を使つて言葉や短い文章の合作……。

○サクラ（二頁、三頁）
（讀本學習前）
入學當初なので極自由に家庭的にお花見をしながらの話し合ひ。
○ズイブンキレイデスネ
○一パイサイテルネ
○トホクノハウニモサイテルネ

○シロコイ（四頁）
（讀本學習前）
犬（文部省唱歌）を鑑賞せしめた後犬について好き嫌い及びその名前遊んだこと等についての言語發表。更に挿繪の說明（指名して發表せしむ）
○ボクハ犬ガ大スキデス
○ボクンチノ犬ハ小サクテトテモカアイイデス
○イマボツチヤンガ　シロコイツテシロヲヨンデ　アソビニイクトコロデス

○ヘイタイススメ（五頁）
（讀本學習後）
兵隊さん（文部省唱歌）をうたひ、行軍の繪を觀察せしめ次の文の鑑賞
○ススメ ススメ ヘイタイ ススメ
ラツパ ヲ フイテ トツトコ ススメ
○ススメ ススメ ヘイタイススメ
オウマニノツテ パツパカススメ

○アサヒ（六頁）
（讀本學習前）
早起きをなさしめ、朝の情景（日の出）の發表。
○ケサ ママ ニ オコサレテ オキテ ミタラ オヒサマガ オヤマカラ デテクルトコロデシタ。ボクハ マブシクテ メガアケマセンデシタ。

○ヒノマルノハタ（七頁）
（讀本學習後）
朝會の國旗揭揚の後次の文の鑑賞（聽寫）
○アサヒ ヲ アビテ オソラニタカク
コツキ ガ アガル ヒラヒラアガル
アア イサマシイ イサマシイ

○テフテフ（八頁）
（讀本學習前）
野遊び（校外學習）野原の情景について自由な話し合ひ……平常あまりお話ししない兒童の指導……

（つゞく）

知識交換

或る座談會

源氏物語の女性について

K記者

S子「普通から申せば執拗とか、妬卑とか云つて、思ひ棄てらるべき六條の御息所が、何故源氏の讀者に對して、多くの魅力を揮ふのであるか、彼の醇厚そのものゝ如き本居宣長大人をしてさへ、御息所の爲めに態々「手枕」一篇を著作せしめたのであるか……私は、これを、作者が、源氏の他の女性のやうに、御息所をロボット扱ひにせず、只管、其の眞實性を描いたからに……歸したいと思ひます。

源氏全篇を讀むには、時に時間のゆるさぬ場合も、私は、折々、此の御息所の登場する場面丈けを拾つて、それに讀み耽つたり、又謠曲では「葵の上」や「野の宮」を好んで謠ふのも、畢竟、此の眞實性に動かされるからで御座います。

河原の院に「夕顏」を斃し左大臣の館に「葵の上」を亡きものにした六條の御息所は、其の後も悶々の情やる方なく、彼の伊勢の齋宮に定まつた姫と共に、一度は嵯峨野の「野の宮」に入られたが、はしなくも、源氏の君の訪問を受け、こゝにも悽艶無比の舞臺を展開いたします。

それから御息所は、息女と共に伊勢に下りましたが、暫くして再び都に上り、源氏の配流や招還や、くさくさの世故に觸れて、病弱のまゝに出家し、終に懊惱裏に薨去されたあたり、作者は、隨分深刻に筆を揮つて居ります。

生きての世では、始終壓迫を感じてゐた御息所も、亡き數に入れば、源氏は、それが又慕はしくあはれとも覺え、いとせめての心やりに、伊勢から歸られた其の姫を養女として六條館に引き取りました。

源氏の正妻紫の上が春に趣味があるに引きかへて、此の姫は、秋を特に愛したところから、姫入内の後は、人々これを秋好む中宮と稱へました。

此の中宮は光源氏を父として入内した後も、より〳〵六條館を訪れて、其の里御殿に安らかな日を送ることもあつたので御座います。

「今はかう、しづかなる御住居に、しば〳〵も參りぬべく、何とはなけれど、過ぐる齡に添へて、忘れぬ昔（六條の御息所在世の頃のこと）御物語など、うけたまはり聞えまほしう思ひ給へるに、何ともつかぬ身の有樣にて、さすがにうひうひしく、所せくも侍りてなん。我より後の人々に、かたゞ〳〵につけて後れ行く心地し侍るも、いと常なき世の心ぼそさの、のどめ難うおぼし侍れば、世ばなれたる住居にもやと、やう〳〵思ひ立ちぬるを、のこりの人々の、物はかなからん、たゞよはし給ふなど、さきゞ〳〵も聞えつけし、心たがへず思し留めて、拜せさせ給へなど、まめやかなる樣に聞えさせたまふ……故御息所の御身の苦しうなり給ふらんありさま、いかなる煙の中に惑ひ給ふらん（魔道に墮罪してゐる）なきかげにても、人にうとまれ奉り給ふ」と、鈴虫の卷にも御座います通り、一つは罪ほろぼしに、源氏は、始終此の秋好む中宮を慰め、亡き御息所に回向してゐたので御座います。

しかし、御息所の徹底した執念は、これら我が姫の幸福が、源氏に依つて將來せられたこと等で解消せず、終に、死靈となつて、源氏の正妻紫の上に憑き、病死せしめて了ひます。

源氏の作者は、しかしながら、聊かも、此の御息所の執念に嫌惡の言を發することなく、飽くまでも、それに同情し、それをいたはる事を忘れては居りません。

其の證據は、秋好むが入内して後の、加茂のみあれの日、中宮の御車の威權並びなきにひきかへて、夕霧の中將（即ち葵の上の所生）は臣下として、秋好むの前に低頭平身しなければならなかつたことを、さも心地よげに書いてある事で、これを讀むものは、作者が、いかに御息所最負であつたかをうなづきます。

此の御息所の手跡が、非常に優れてゐたことは、前にも一寸申しましたが、源氏は、書のはなしさへ出れば必ず此の御息所のそれを賞揚して居りました。

天台の蘊奥をたゝいた女性法華經の研鑽者として第一流の婦人、とにもかくにも御息所は、當時の巾幗者の中に、一頭地を抜んでゝ居りました。

何にしても、薄霧を隔てた中に見る夢のやうな藤原文學、私は、作者も、紫式部一人だと斷定したくないとさへ思つて居ります……誠に荒つぽいお話で、まとまりがつきませんで御座いました……何れ委しいことは何かの機會に……」

かくてS子の、源氏の女性についての譚は終結した。

一同が、夢から覺めたやうな眼を上げて仰ぎ見た窓外は已に薄暮……苦茗を啜つて解散した。（完）

學校長各位に

時報に父兄の聲が出ました最初の者です。大いに歡迎すると同時に、踵を接して父兄の聲を聽かせて欲しいのです。

教育の仕事に父兄を入れなければ寂寥を感じ大體物になりません。學校と役所と家庭との繋き、それは本紙の使命です。

此に父兄の聲の現はれたことは、來るべきものが來たのだと思ひます。

そこで學校の方からの、御依頼であれば（住所氏名を寄せて）御指名の家庭に本紙を無料で配布致す用意あり。御申込下さい。

但、受つけ數の多い時は各校毎に發送口數には制限をつけます。

通信希望

肥馬天高の秋は酣にして正に運動シーズン、校庭に郊外に、こゝ廣場とあれば勇躍する雄々しい可憐な小國民の運動振を報導するのも秋らしい時報の役目であらう通信記事を希望す。

兩師範學校長滿洲視察

全國師範學校長協會は九月二十九日三十日二日間、滿洲國新京に於て協議大會を開催するため、本縣男女兩師範學校長は出席のため文部省から出張を命ぜられ、佐藤氏は九月二十日、結城氏は同二十四日出向の途につかれた、佐藤氏は二十二日朝鮮釜山上陸、二十三日京城に入り、即日金剛山觀光の途に登り、二十七日一端歸京の上滿洲に向はるゝ由報導に接す。

歸朝は何れも十月十六日門司港着の筈。

石川清野訓導逝く

川崎市高等小學校訓導石川清野氏は、入院加療中の處、手術後の經過思はしからず漸次危篤症狀に陷り本月二日午後一時東京聖路加病院にて遂に逝去された。愼んで哀悼す。

圖書館の利用は

尋常三年生が第一

横濱市圖書館調

横濱市圖書館六月中の兒童閲覽狀況は開館日數二十八日閲覽總人員一六七六人である之を男女別にすると男子一、〇七八人殘り女子といふ割合で男子は全體の三分の二に當る、更にこの學年別利用狀況は尋三の五四三人が斷然群を抜き尋四、二一二人、高二、二〇七人の順序である。

次にこれら兒童によつて一番親まれる書物は文學書の八三二冊で地歴の二六〇冊學習書の一二六冊といふ順、理、工、宗教等に關するものは極めて少ない。

新刊圖書紹介

外山福男著

△國民保健衞生の實際問題

本著は著者が我國公衆衞生と保健施設の不備に對し、警察部長として責任の重大を殊に痛感し茲に氏の抱負を健毫達筆に乘せて大に湖江に警告せんと欲する一大文字である。

（定價金三拾錢警察協會山形支部發行）

小說豫告

花園への道

鳳山生

どんな姿で、どんな起伏多き生涯を展開しようとするのか、それが教育者と喜愛を語る好伴侶で、運命を開拓する慰安者で、彷徨へる人類の前途のための燈を雄々しく高くかゝげて其の閃々たる光芒をば教育道に投げかけんとするか。

二十六號の紙面から連載して讀者の批判を仰ぐ事にしたい。

父兄欄

家庭から學校へ（承前）

一父兄より

八

殊に學校の內幕をいふと、こんなことがある。明日快晴なら某地へ遠足をすると宣言する。子供の方では、夜の眼も眠らずに悅んでゐる。勿論父兄もせがまれる儘に辨當や携帶食品まで準備して與へる。

處が天氣は同情なく頗る曇天甚だあやしい模樣である。此の時の教師は緊急職員會を開く。新聞數葉を取寄せ天氣豫報を研究する。測候所へも電話する。併しどうも時間が來て見ねば乃ち勝負して見ねば降るのかしぶ〳〵ながら天氣が持つのか明瞭でない。そこへ窓外の子供は先生〳〵行きませうと哀願する。終に到底堪えきれない爲に餘儀なく出發する。幸に雨が降らねば批評はないが若し降つたとしたらこの時の父兄の小言は恐しい。今の學校教師は子供を大切にしない。

天氣のよし惡もわからぬのかこの天候に出掛けることは何事だ」と叱責の矢を向ける。處がそれと反斷に、中止を斷行する。斷行した後で、雨が降らぬと又「ナゼ遠足をやらぬか」と是も非難が多い父兄は地位をかへて見るとわかるが、中々左樣なことは出來ぬと見える。

とにかく斯樣な事例で考へて見て學校が止むに止まれずやる事もあるからこの點に就いては、大に寛恕しなければならぬ。

九

しかし我々は大に寛恕するが、どうか學校當事者の方でも亦大に注意して貰はねばならぬことがある。それは諸君の仕事で「生物を取扱ふものである」といふ次第である。運動中に卒倒することがあり、授業中に腹痛を訴ふることもあらう。餘り心配を過大にして騷過ぎてもこまるが、辛抱を無理强ひにして大事たらしめることもある。こゝの緩急を適當にしてもらはねばならぬ。年頃の女生徒などを、遠足の際等に、早朝に或は夜陰に某所へ集合せよなどとは無理である。全家庭が迷惑する。遠足などは半舷交代にして引率教員を二倍にしていただきたい。怪我病氣になつてから職員が繁く見舞つて呉れたり、大事になつたあとでお通夜などして呉れても、それは後の祭である。海軍思想養成の見込かも知らないが、船の遠足などはやらぬがよい。何も學校で何もかも教へねばならぬものではない。船で運んで大事の起つた事は、天下に事例が多い。殊に船には非常に弱い人がある。處が乘出した以上は著岸まではどうすることも出來ない。この一事だけでも舟行などはおよしなさい。

一〇

つぎに教育家は、健全なる思想を與へることに留意していたゞきたい。學問技術は、子供の天賦でも甘く受入れぬこともあらうが、人間を訓練して、我々の後繼者たらしむべく、日本の將來の爲に益々國體國威を發揚するやうに、思想の扶植には、格別の御盡力を請はねばならぬ。我々は、諸君を信賴して此のことは切望する。近來、教育家の思想を疑ふに至るものが出來たと傳へられることは、健全なる教育家にも累を及ぼすわけで眞にお氣の毒である。しかし、斯樣な不都合なものがある場合に、松柏の操を發揮されることが、とりわけ大切なりとして努力を切望する。

一一

最後に今一つ御願がある。教育家は毎日子供を見てゐられるから子供の成績を早く見つけて戴きたい。試驗の結果斯樣に成績がわるいなどゝ通告しないで早期發見を希望する。この分では末々が案じられるからといふ程合の時に御知らせ下さらば何とでも手が付けられますのに愈大患危篤狀態の時に引導的の御通告は迷惑至極である。それから中等學校等で御氣に入らぬとすぐに退校處分などにしてあとは野となれ山となれこちらの關係はないといつた薄情な取扱は今後とも絶對に御止め下さる樣に希望いたす次第である。さる高僧が不良な小僧を愛撫するので他の多數な小僧連が不良小僧を破門すべく和尙に申でると汝等は手離しても心配なき輩であるが彼はもつと面倒を見なければ將來が案じられる。至し俺が見捨てたら誰が彼を指導するかと謂はれたことは今の中等教育の先生方の御參考に供し奉る。處罰主義の學校が優良なものではない。

まだ〳〵御相談申上げたいことはあるが他日に讓る。どうか斯樣な記述を心よく御讀み下され又受入らるゝ教師の一人でも多からんことを希望する。

外山福男著

△日英保健衞生の比較研究

本書は「國民保健衞生の實際問題」の姉妹篇であつて英國を對照に彼我の地方制度と保健衞生行政の實狀を比較した何事にも忠實な氏の奉公心の顯れである、詳細は山崎博氏の讃評につき悉す所である。

（定價金四拾錢警察協會山形縣支部發行）

愛甲郡通信

○愛甲郡學校衞生協會では九月二十六日厚木小學校に評議員會をひらき健康優良兒童表彰の件につき協議した。

○愛甲郡小學校兒童聯合運動會は來る十月二十二日荻野小學校庭において行はれる、既に諸般の打合は濟み郡下各小學校は運動練習に沒頭してゐる。

○菩提小學校主催愛甲郡籠球大會は九月二十三日午前十時同校々庭に開會された、この日參加チーム十一、各校選手は獨特の妙技を演出し試合は文字通り白熱的であつた、夕陽西山に近き頃厚木對依知の決勝行はれ三五對四のスコアをもつて厚木校快勝し優勝旗は同校チームの手におちた。

縣下學校の樣々

素晴らしく大きい學校

平塚第一尋常小學校をたづねて

紫翠生

紹介し　たみてい

空はあくなき碧青をたたえた、ひそやかな秋の午さがり！――大正十年十一月時の皇太子殿下の野に練りたまふ大演習を行はせたまひしその砌、かしこくも待從御差遣の光榮を得た榮譽ある平塚第一尋常小學校をおとなふこととした。

小ざつぱりと掃き清められた前庭には、しつとりと打水がしてある。流石に「校庭の綠化」に生命を捧げらるゝ現校長の反映に、庭の隅々にまで數知れない木々が植えこまれてゐる。こゝが日本第一――おそらく世界でも比べるものがない大「小學校」兒童數三千七百七十六名といふ全く奇蹟的な超弩級校だ。

學校長三觜三郎氏は人も知る八面玲瓏の君子！よく歌ひよく書き、よく語る、おそらくよくといふ形容詞を種ぎれにする程の人。二十餘貫の巨軀をどつかと廻轉椅子におちつけて泰山鳴動するもびくともせぬ從容さ。

訪問子を快くむかへられた。來意をつげると

「そう大きい事は大きいな。現在學級數六十七、職員七十七名、校醫四名、看護婦一名使丁四名、計八十三名の大世帶さ。まあ世界でも比類尠い事であらう。」

「講堂もずいぶん廣いものだね……」

「間口十二間、奥行二十間二百四十坪となりますか……まあ廣さでは縣下一でせう。しかし現在の兒童を全部收容出來ないさ。それで尋三以下を一回、專四以上を一回とに頒けて儀式などする始末、全くテンテコ舞」

「校地もたいしたものでせう。……」

「いや割合に狹い、確か五千四百坪、高等小學校の校地は七千坪もあるといふ。それだから運動場にこどもを出すとこどもの上にこども全く手や足のやり場がないやうだ。」

「校舍の隅から隅までおあるきになると隨分かゝりませうね。……」

「廊下傳ひにいつたらばおそらく三四分はかゝらうね。」

「校長先生毎日の御巡視も……」

「はあ一教室一分づゝ參觀教室から教室への出入が一分六十七學級をまはるには都合二時間と十四分を要する理由だね。全く僕のやうな太つちよは汗ダクとなつてしまふよ。」

「現在學級數の多い學年は……」

「尋常二年で十三ある。其他のものでも十學級が最小といふところだ、それだから學年には正副主任を置いて經營してゐる。主任はだから小さい學校の校長格さ。……」

「こんな廣い學校では迷子になりそうだね。」

「いや、いつかも田舍の村長さんたちが見えたがまるで兵隊やしきのやうだとぶつたまげてゐたが、その中の一人が遲れてどういつたものやらと同じところをいく廻りもしたと澤してゐられた。」

「かういふところの學校長は非凡の方でないと務まらないですね。」

「いや、まあ聲の大きいことが一つの要件かね。全校生徒に訓話するときなど小さい蚊の鳴くやうな聲ではとほらないからね。それから襟度の大きい事だ。清濁あはせ呑む――少し位のことは肚の底にぐんとしまひ込んでびくともせぬ人が必要さ。……」

「先生など全くその適任といふところだね」

「はあ……いや。かういふ學校を經營して行くと都合のよいことも惡いこともあるよ先づ體育にしても智育にしても夫々兒童の個性に應じて充分に天賦を伸ばしてやることが出來る。僕は赴任以來暑中休暇の前後を利用して長所助長教育をやつてゐるが隨分面白い。兒童を各々天賦によつて集め、これを得意の教師につけて、圖書・書方・手工等の指導してゐるが近來成績がめき〳〵あがつて來た。これなど大きい學校でなければ出來ぬところさ。」

僕は兒童に經濟思想を養成するために貯金を奬勵してゐるが、一年間――一學年の貯金高が一萬五千圓を突破する程だ。これを在學六ケ年通して經續したならば優に十萬圓になる。塵も積れば山となるといふが、莫大なものと喫驚するね。この意味から僕は職員の共濟貯金を奬勵してゐる。お互が零細な金を醵出して貳百圓――參百圓と融通して貰ふことが出來る。全く親愛協和と經濟思想の養成と一石二鳥の收穫が出來る……。」職員の研究にしても職員の勞作にしてその結果がはつきりするので仕事にはげみがつくね……」

「大きい學校でお困りのことは……」

「そう大きいがために目のとゞかぬところが出來ることだね。したがつて職員の個性など時に見逃してしまふことがある。兒童にしてそうだね遠足など一學年五百人以上になるので汽車など二回に分乘して送るといふ始末だからね。だから僕は常に學校長の息がかゝらぬ域のないやうにしたいと努力してゐる。そして校内のどんな隅でもほゝきのとゞかぬところのないやうに專心してゐる。……」

外にはさん〳〵と秋の陽が輝いてゐる。巨船空しく大洋に泛んでゐるのではならない……大きい學校は大きい學校としての個性を曜如たらしめるやうに努力しなければならない。」三觜校長の言葉を胸の裡に何べんも繰返して見た外には縣下は勿論、明治神宮にまで遠征して「平塚第一」の勇名を馳せてゐる選手がユニホーム凛々しく跳ねてゐる。（平塚通信）

濱市子安小學校研究發表會

横濱市教育研究會は、其の組織全市を六班としてから其の第一組として最初の發表に子安小學校が立つたのである同校は市内唯一の大學級組織で其の數四拾二、教員數又五拾に垂ん〳〵とし兒童數は約二千五百を突破すと言ふのであるから、之れが統制はなか〳〵容易でない。

同校の主義とする勤勞作業と鄉土教育の合作に成れる算術、工業、商業、家事科、それに職業教育としての實務科の實地指導を發表した。

意見發表は中村校長の「我が校の教育概要」を皮切りに訓導馬場氏（算術）萩原氏（工業）藤本氏（商業）藤原氏（家事）美藤氏（實務）と順次に熱辯を振つた。

質疑應答に入りて教師用算術書を兒童に使用せしめる可否につき質疑あり市視學、指導員の講評に移り午後四時半散會した、當日役所側の出席者は縯縯、川口、鈴木、隈部各視學、東本、[illegible]員の顏振[illegible]

愛甲郡依知尋常高等小學校
縣指定學校衞生視察概要

昭和八年九月二十二日依知尋常高等小學校縣指定學校衞生視察は縣より今井講師臨席隣接小學校長及其の他多數の參觀者ありて盛大に行はれた常日午前中は　一、朝禮　二、矯正體操　三、衞生教授　四、給食狀況等の視察があつて午後衞生研究協議會に入つた。

先づ開會劈頭學校長大矢雄次氏は左の如く學校衞生の方針を述べた。

一、衞生養護施設の擴充を圖り體質健康上の缺陷を除去すること

一、學校給食の目標を兒童の營養と訓育とにおき合理的方法と周到なる指導とをもつて實行しこの劃期的事業を發達させること

一、體育運動は其の實行を合理的ならしむる爲に兒童各自の體質健康に適應して運動の種目及程度を定むること

一、虛弱兒童の監督養護に關する施設を擴充してその指導を適切にすること

一、鄉土の衞生諸施設と連絡して學校衞生の社會化を計ること

了つて二三質疑應答參觀者の批評あり、最後に今井講師の懇切なる講評があつた、こゝに其の大略を示す。

一、體操器具の設備と其の運用指導の巧なること

二、校舍の設計が衞生方面をよく顧慮してあること

四、換氣、溫度の保持等も可

五、屋外運動場の設備、兒童數に對する面積の割合等も充分である

六、學校給食の狀況は計畫的而も教育的である

尙溫度の身心に及す影響につきて學理的說明があつた

午後五時十分此の意義ある研究協議會は閉會された。筆者は大矢校長の教育理想が今回の行事にもよく現れてゐることに感銘した。特に學校給食の狀況にいたりては微に入り細に渡つてゐるので諸兄の參考とさるゝこと多きを思ひ後日詳しく記す考である。（愛甲通信）

多年勤續功勞の教員勇退者を縣教育會が表彰

多年本縣教育事業に携はり幾多の功績を殘して勇退された諸氏に對し、その功勞に酬ゆるため本會より感謝狀並に記念品を贈呈することになつたが、今回は左の三十氏である。

三十年以上（銀杯一組）
黑部銀八（西秦野）高木ウメ（中原）高井安治（半原）内田寅藏（南吉田）藤江天城（市場）川崎久治（藤澤）の諸君

二十五年以上（銀杯一個）
木村林藏（澤山）野村まさ（豊島）星谷賀六（茅ヶ崎）吉原清四郎（都岡）石井嘉十郎（土屋）青木清治（吾妻）下澤國平（金田）小野莊之助（開成）多田内喜一、中村）石黑照壽（片浦）小泉終吉（日枝）並木治作（神奈川）二宮完造（鳥屋）横田文忠（玉縄）の諸君

二十年以上（木杯一組）
清水德造（茅ヶ崎）土方ハナ、（藤澤）比企隆三郎（平塚第一）矢後忠吉（向丘）渡邊てる（紅蘭）宮久保武雄（壽）長崎菊五郎（瀧頭）富田艷（元街）館野茂（藤澤）平田哲宗（眞鶴）

山元小學校とは

舊江吾田校の改名

横濱市中區山元町、江吾田小學校は町名改正に伴ひ山元尋常高等小學校と改稱したが本家本元の縣學務課にさへまだ知らぬ人もあるといふので皆さん御存知ですか。

新設した三ツ澤小學校

横濱市青木小學校の三ツ澤分校は獨立して三ツ澤尋常高等小學校となり、此程大綱小學校長矢部清一郎氏が校長として轉任された。

相次ぎ千葉縣產業視察の旅

縣聯合の男女青年團

縣聯合男子青年團は女子青年團より一足先來る十一日より三日間千葉縣下の產業狀況視察を次の日程の通り行ふ筈

第一日　小御門農學校、伊能忠敬遺跡、香取神宮、笹川町青年團、銚子泊

第二日　銚子醬油會社、城東町採種田、農業倉庫、小湊誕生寺、鴨川泊

第三日　主基村產業組合安房農業科學研究所等の見學

をこゝろみ、歸路は海上にとり大貫より東京灣横斷横濱着の筈である。

女子青年團の水鄉巡り

千葉にコースを變更

既報縣聯合女子青年團の縣外旅行はコースを變更して十九日より三日間千葉縣椎柴村笹川町神代村の視察、銚子ヤマサ醬油の見學をなし、途中成田不動、香取、鹿島の社寺めぐりをなし水鄉の秋を滿喫して二十一日歸縣する。

防空演習餘談

死期迫る母を念じつゝ

大任を果した二青年

去る八月國民總動員によつて擧行された關東防空大演習に秘められた佳談哀話の數々

これは高座郡麻溝村小山操と云ふ青年である。演習もクライマックスに達した十日の午後、君は第二組監視哨の勤務中、家には餘命旦夕に迫つた病母が他の兄弟たちにみとられてゐた。この母の死と今日の大任とを前にして流石に君の決意も鈍らざるを得なかつた。だが今日の使命の重きに父君に促さるゝまゝ病母の枕邊に涙の永訣をつげて參加した。一度任務については夜を日に不眠不休、數日前からの看護の疲勞も打忘れて活動を續けてゐた。その間にも母君の容態は刻々に惡化して行つた事は言ふまでもない。やがてのその急使

「お母さんが危篤です」

「母とは既に永別をつげた身今はこれ迄とこの日の重責を完全に仕末して我家へと駈けつけた時、母はまだ此の世の人であつたが、死に瀕した母は既に君を辯ずる事さへ出來ない。母の手を堅く握りしめた君の手に微かに眼を見開きやがて靜かに永眠されたのであるとか。

× × ×

他の一人の青年は足柄上郡酒田村齋藤芳治君である。兄弟四人の頭として親たちに仕へ家業一切を切盛りしてゐて朝晩寸暇もない生活であるが平素修養向上に燃える君は實業補習青訓の模範生として推賞されてゐた。だが天はこの有爲篤行の君に幸福ばかりを與えなかつた。君も亦いたつきに惱む母を家にして、第一線に活躍しなければならなかつた。未だ老境でない母、すぐにも恢復する事と思つてゐたにもかゝはらず病勢は日に危險を加へて、既に五月以來四ケ月にもなる。遂にはたのむ醫師も絶望し一家は悲觀の底に沈んだ。しかし「醫師の及ばぬ所は眞心でといふ信念で看護に益々精進した。丁度防空演習の頃は全く危篤の狀態に陷つた。これを知る指導員は勤務を休む樣にも勸めたが「國家非常時の大切な演習であるから訓練生としての本分を忽せにしてはすまない」と奮然その部署につき立派に任務を全うした。

演習が終つた三日目の朝母君は遂に瞑途に旅立れたといふことである。

讀者文藝欄

「九州旅行・斷片」

——民謠詩作、其の二——

都田校　中村泰明

九州に旅しての、貧しき民謠素描です「一片の浮雲にも心ひかれて——」處女地の行脚なんてものはネ。詩的印象の特に深かつた、ていふ所をまとめて見たです。短章だけを發表します。

別府の宿で

×　×

湯氣に、砂風呂
からむまま
今宵、名殘の
湯の薫。

×

窓の手摺に
湯上りの
根室の人も
隣して。

×

アイヌの、明日の
話など
何故か、心に
輪を描く。

×

沖の潮鳴
途切るまま
別府、名殘の
風呂びたり。

——別府D旅館にて——

濱の潮風

（註、北海道の根室なり）

何故かしら
濱の潮風
風の間に

×

觸れて見たさに
來たものの

×

何も忘れて
濱の潮風
夢靜。

——博多の海で——

初便り

胸に抱かせて
旅日記。

×

君の契に
酬ゆる程に。

×

博多人形の
初便り。

——博多で・友人に送る——

連絡船で

旅よ、九州
別れの船に
歸る、この身の
思ひ出も。

×

博多人形の
紙包
そつとちぎつて
波に捨て。

×

波のまにまに
あれ、白ほ帆も浮いて
門司よ、別れか
鱗雲。

——下關、門司間、連絡船の中で——

「自然」

秋本理貴

近頃、特に目立つて、蒼白な人間を、衢々に多く見受る——近代文明の所產だ。

人達は今、餘りに疲れて居る。それが故に、ユーモアー——喜劇、漫畫、漫文、漫談を、乃至は解放を——終局する處、心ある人は、野の自然を極度に求めて居る。

（私も其の一人だ）

日曜日など、郊外へ郊外へと、都人士の流れ出ることは不思議ではない。

◇

此の間の日曜に、私も、一人ぶらりと都筑の丘へ出かけた。都筑の丘と言つても知れまいが、横濱から程近い處だ丘が幾つも、幾つも、蒲鉾型に重なり合つて、其の裾を輪狀の村が圍んでゐる。私は此處の丘の、青々とした芝草の上に、仰向けに寢て、松籟を聞きながら、蒼空を凝視するのがたまらなく好きだ。

◇

南の空の端から、次々と浮き上つては、靜かに流れる白い雲——此の自然の驚異こそ人生の流轉に似て、悠久なる寂寞を物語つて居る。こんな時群集から遠ざかつて生活から離れて、たつた一人のさらけ出された魂の存在を、私は幸に思ふ。ロダンが花を愛した氣持そこまで倒達することが出來る。

連々たるアルプの山脈も、大地も、木立も、或は渺渺たる海の彼方も、御神火も、更に又、太陽も、星も月も、自然の姿は、裸體の人間の魂を限なく打つ。

◇

山懷に抱かれて、月を、星を、……陽を望む時、何やら胸底から込み上げて、ほいほい泣けて來る樣な氣持、一本の草木にさへ祈りたくなる氣持、自然の寂が持つ偉大なる美しさ、力がさうさせるのだ。ホイットマンの、子供の樣なレコードはこの期の代表作家ハイドン、モツアルト、ベートーヴェン三人の名曲を選びました。

▲ハイドン（一七三二—一八〇九）

—フランツ、ヨセフ、ハイドン—

さてこの期の音樂家としては

最隆盛期
- 前期
  - アルカンゼロ コレリ（1653—1713）
  - ドメニコ、スカラッチ（1685　1757）
  - エマヌエル、バハ（1714—1788）
  - ムチオ、クレメンチ（1752—1832）
- ハイドン Frang Josepl Hydon（1732—1809）
- モツアルト Wolfgang Amadeus Mogart（1756—1791）
- ベートーヴェン Ludvig van Belthoven（1770—1827）

洋樂レコード、コレクシンに就いて（三）

河東追牛

—モツアルト（一七五六—一七九一）

—ヨルフガング、アマデウス、モツアルト—

○交響管絃樂

V	自	九二〇四	九二〇一	交響曲（第四十一番）ハ長調（ジュピター）	ロンドン交響管絃團 コーツ指揮	十二吋 赤	四、〇〇
V	至	九四四	九四三	交響曲（第三九番）變ホ調	ベルリン國立オペラ座管絃團 クライベル指揮	十二吋 赤	三、〇〇
C	自	七六八	七六八	交響曲（第四〇番）ト短調　作品五五〇	伯林國立管絃樂團 ワルター指揮	十二吋 青	三、〇〇
C	至	七六四	七六四				
P	自	四〇三三	四〇三三	セレナード	伯林國立歌劇場管絃樂團 フリード指揮	十二吋 青	二、五〇
P	至	四〇三四	四〇三四				
P		四〇四六	四〇四六	歌劇「フイガロの結婚」（序曲）	伯林フイルハーモニック管絃樂團 ホレンスタイン指揮	十二吋 青	一、〇〇
V		一四六	一四六	歌劇「魔笛」（序曲）	紐育フイルハーモニック交響管絃團 メンゲルベルグ指揮	十吋 赤	一、〇〇

○五重奏

C	自	七四五	七四五	五重奏曲　イ調	レナー絃樂四重奏團 ドウレーパー（クラリネット）	十二吋 青	四、〇〇
C	至	七四四	七四四				

○絃樂四重奏

C	自	七三九	七三九	四重奏曲（K四二一）ニ短調	レナー絃樂四重奏團	十二吋 青	四、〇〇
C	至	七三八	七三八				
C	自	七四一	七四一	四重奏曲（K四五八）變ロ調（狩獵四重奏曲）	レナー絃樂四重奏團	十二吋 青	三、〇〇
C	至	七四〇	七四〇				
C	自	七四四	七四四	四重奏曲（K三八七）ト調	レナー絃樂四重奏團	十二吋 青	四、〇〇
C	至	七四三	七四三				
C	自	七六六	七六六	四重奏曲（K四六五）ハ調	カペエ絃樂四重奏團	十二吋 青	四、〇〇
C	至	七六五	七六五				

▲ベートーヴェン（一七七〇—一八二七）

—ルウドヰヒ、ファン、ベートーヴェン—

○交響管絃樂

V	自	七三一	七三一	交響曲（第一番）ハ長調（作品二一）	紐育フイルハーモニック交響管絃團 メンゲルベルグ指揮	十二吋 赤	六、〇〇
V	至	七三四	七三四				
P	自	八〇〇一六	八〇〇一六	第二交響曲（作品三六）ニ長調	伯林國立歌劇場管絃樂團 クライバー博士指揮	十二吋 赤	四、〇〇
P	至	八〇〇一九	八〇〇一九				
P	自	八〇〇一〇	八〇〇一〇	第三交響曲「英雄」變ロ調（作品五五）	伯林フイルハーモニック管絃樂團 フイツツナー博士指揮	十二吋 赤	六、〇〇
P	至	八〇〇一五	八〇〇一五				
P	自	四〇二六四	四〇二六四	第四交響曲（作品六〇）變ロ調	伯林市立歌劇場管絃樂團 フイツツナー博士指揮	十二吋 青	五、二五
P	至	四〇二六八	四〇二六八				
P	自	六〇一三四	六〇一三四	第五交響曲「運命」ハ短（作品六七）	伯林國立歐劇場管絃樂團 フイツツナー博士指揮	十二吋 赤	四、〇〇
P	至	六〇一三七	六〇一三七				
P	自	八〇〇四〇	八〇〇四〇	第六交響曲「田園」（作品六八）調	伯林國立歌劇場管絃樂團 フイツツナー指揮	十二吋 赤	六、八〇
P	至	八〇〇四五	八〇〇四五				
C	自	七一六	七一六	交響曲（第七番）イ調（作品九二）	伯林フイルハーモニック管絃樂團 ロイアル、フイルハーモニック管絃樂團 ワインガルトナー指揮	十二吋 青	五、五〇
C	至	七一四	七一四				
C	自	七一七	七一七	交響曲（第八番）ヘ調（作品九三）	伯林國立歌劇場管絃樂團 ワインガルトナー指揮	十二吋 赤	七、二〇
C	至	七一七	七一七				
P	自	六〇〇七三	六〇〇七三	第九交響曲（合唱）ニ短調（作品一二五）獨逸語	伯林國立歌劇場管絃樂團 フリード指揮	十二吋 青	三、九〇
P	至	六〇〇七九	六〇〇七九				
P	自	四〇一九一	四〇一九一	レオノーレ第三（序曲）	伯林國立歌劇場管絃樂團 クレンペラー指揮	十二吋 赤	二、五〇
P	至	四〇一九三	四〇一九三				

○三重奏

V	自	三〇四五	三〇四五	三重奏曲—ト長調	コルトー テイボー カザルス	十吋 赤	二、六〇
V	至	三〇四六	三〇四六				
C	自	七六八	七六八	四重奏曲（K四五七）ト調	レナー絃樂四重奏團	十二吋 青	二、六〇
C	至	七六三	七六三				
C	自	七四二	七四二	四重奏曲（K四六〇）ニ調（ラールゴ四重奏曲）	レナー絃樂四重奏團	十二吋 青	三、九〇
C	至	七四〇	七四〇				
V	自	四〇八九	四〇八九	交響曲（第十三番）ト長調	伯林フイルハーモニック管絃團 ウインフイルハーモニック管絃團 クラウス博士指揮	十二吋 赤	三、六〇
V	至	四〇九一	四〇九一				
V	自	七〇七	七〇七	交響曲（第四番）ニ長調（一名「フロック交響曲」）	紐育フイルハーモニック交響管絃團 トスカニーニ指揮	十二吋 赤	四、〇〇
V	至	七〇六	七〇六				
P	自	四〇四三	四〇四三	「驚愕」交響曲	伯林フイルハーモニック管絃樂團 ホレンスタイン指揮	十二吋 青	七、五〇
P	至	四〇四三	四〇四三				
V	自	七〇六六	七〇六六	交響曲（第六番）ト長調（一名「驚愕交響曲」）	「ボストン交響管絃團 クーセヴイツキー指揮」	十二吋 赤	三、二〇
V	至	七〇六〇	七〇六〇				

○交響管絃樂

V	自	七三一	七三一	交響曲（第一番）ハ長調（作品二一）	紐育フイルハーモニック交響管絃團 メンゲルベルグ指揮	十二吋 赤	六、〇〇
V	至	七三四	七三四				
P	自	八〇〇一六	八〇〇一六	第二交響曲（作品三六）ニ長調	伯林國立歌劇場管絃樂團 クライバー博士指揮	十二吋 赤	四、〇〇
P	至	八〇〇一九	八〇〇一九				
P	自	八〇〇一〇	八〇〇一〇	第三交響曲「英雄」變ロ調（作品五五）	伯林フイルハーモニック管絃樂團 フイツツナー博士指揮	十二吋 赤	六、八〇
P	至	八〇〇一五	八〇〇一五				
P	自	四〇二六四	四〇二六四	第四交響曲（作品六〇）變ロ調	伯林市立歌劇場管絃樂團 フイツツナー博士指揮	十二吋 青	五、二五
P	至	四〇二六八	四〇二六八				
P	自	六〇一三四	六〇一三四	第五交響曲「運命」ハ短（作品六七）	伯林國立歐劇場管絃樂團 フイツツナー博士指揮	十二吋 赤	四、〇〇
P	至	六〇一三七	六〇一三七				
P	自	八〇〇四〇	八〇〇四〇	第六交響曲「田園」（作品六八）調	伯林國立歌劇場管絃樂團 フイツツナー指揮	十二吋 赤	六、八〇
P	至	八〇〇四五	八〇〇四五				
C	自	七一六	七一六	交響曲（第七番）イ調（作品九二）	伯林フイルハーモニック管絃樂團 ロイアル、フイルハーモニック管絃樂團 ワインガルトナー指揮	十二吋 青	五、五〇
C	至	七一四	七一四				
C	自	七一七	七一七	交響曲（第八番）ヘ調（作品九三）	伯林國立歌劇場管絃樂團 ワインガルトナー指揮	十二吋 赤	七、二〇
C	至	七一七	七一七				
P	自	六〇〇七三	六〇〇七三	第九交響曲（合唱）ニ短調（作品一二五）獨逸語	伯林國立歌劇場管絃樂團 フリード指揮	十二吋 青	三、九〇
P	至	六〇〇七九	六〇〇七九				
P	自	四〇一九一	四〇一九一	レオノーレ第三（序曲）	伯林國立歌劇場管絃樂團 クレンペラー指揮	十二吋 赤	二、五〇
P	至	四〇一九三	四〇一九三				

お斷り

「神奈川縣教育事情の變遷」は紙面の都合に依り今回は休載致します

鄉土教育原論

日本精神の生命論的見地に立てる

著者　濱松師範學校長　長谷川藤太郎

發行所　東京市神田區駿河臺　目黑書店

定價　金壹圓五拾錢

文豪德富蘇峰先生が「師範學校長の教育論」と題し、東京日々、大阪毎日兩紙上「日々だより欄」に於て、筆を極めて激賞されたのは本書である。

鄉土教育論は汗牛充棟も啻ならざる程澤山あるが、本書の如く其の論據の確かな物は珍しい。

書名の傍書に「日本精神の生命論的見地に立てる」と題し專ら其の立論の根據を示してゐるのは旗幟鮮明と稱すべきである。そこに先づ本書の特色が伺はれる。

著者の謂ふ所に從へば我が日本には日本精神といふ生命が流れて居る。而かも其の日本精神は典型的な生命である。その日本精神が縱橫兩面の發展をする。縱の發展が歷史的に時代となり橫の發展が地理的に地方となる。鄉土とはかゝる生命の橫の展開なる地方其物である。

其の鄉土は夫々其の特色を有する。本來同一不二なる日本精神が其地〳〵の氣候風土に即して各種各樣なる變化を示す。これが鄉土の個性であり鄉風である。鄉土人はこの鄉風を感得し、助長し、而して鄉土の振興を圖るべきである。かうする事によつて國家は豊かになり又强盛になると著者は主張してゐる。

本書著作の動機は上述の如く祖國愛に存する。だから著者は其の滿腹の精神を第二篇第三章「日本精神の生命觀」に傾倒してゐる。蘇峰先生が「案を拍つて是ある哉と絕叫」されたのは其處である。非常時日本と謂はるゝ今日職に教育にある者の當に一讀すべき良書である。

行文は極めて流暢。寓話例話を諸處に挿入し、讀書をして嫌かせない樣に努めてゐる玆にも著者苦心の跡が見える

鄉土教育即國民教育

著者　長谷川藤太郎

發行所　目黑書店

定價　金二十五錢

本書は本年七月出版された「鄉土教育原論」の姉妹篇とも稱すべきもの、同書を國民教育の觀點に立つて抄略簡潔にし又之に新材料を加へて理解の徹底を期した所に本書公刊の趣旨がある。だから鄉土教育原論を通覽してから本書を讀んでも又本書を讀んでから原論を通覽しても何れにしても相互に理解を助け、從つて又興味も湧く。僅々六十三頁の小冊子であるけれど、內容充實、仲々ガツチリとしたものである。原論に比して行文更に流暢、何等肩の凝りを覺えずに愉快に讀過し去ることが出來る。